

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2024年3月28日

【事業年度】 第82期(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

【会社名】 第一屋製パン株式会社

【英訳名】 FIRST BAKING CO., LTD.

【代表者の役職氏名】 代表取締役社長 細 貝 正 統

【本店の所在の場所】 東京都小平市小川東町三丁目6番1号

【電話番号】 042(348)0211(代表)

【事務連絡者氏名】 経理部 部長 伊 藤 健

【最寄りの連絡場所】 東京都小平市小川東町三丁目6番1号

【電話番号】 042(348)0211(代表)

【事務連絡者氏名】 経理部 部長 伊 藤 健

【縦覧に供する場所】 株式会社東京証券取引所  
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部 【企業情報】

### 第1 【企業の概況】

#### 1 【主要な経営指標等の推移】

##### (1) 連結経営指標等

回次		第78期	第79期	第80期	第81期	第82期
決算年月		2019年12月	2020年12月	2021年12月	2022年12月	2023年12月
売上高	(百万円)	24,751	24,021	23,864	24,552	26,442
経常利益又は経常損失( )	(百万円)	507	354	523	554	617
親会社株主に帰属する 当期純利益又は 親会社株主に帰属する 当期純損失( )	(百万円)	551	368	739	1,145	474
包括利益	(百万円)	535	235	692	1,644	370
純資産額	(百万円)	8,413	8,178	7,485	5,841	6,211
総資産額	(百万円)	18,583	18,537	18,009	17,076	17,730
1株当たり純資産額	(円)	1,215.24	1,181.19	1,081.22	843.72	897.21
1株当たり当期純利益又は1 株当たり当期純損失( )	(円)	79.63	53.18	106.83	165.50	68.51
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	(円)					
自己資本比率	(%)	45.3	44.1	41.6	34.2	35.0
自己資本利益率	(%)	6.4	4.4	9.4	17.2	7.9
株価収益率	(倍)					9.7
営業活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	317	233	10	473	494
投資活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	893	537	646	788	304
財務活動による キャッシュ・フロー	(百万円)	215	287	88	543	698
現金及び現金同等物 の期末残高	(百万円)	1,900	1,884	1,316	2,034	2,923
従業員数 (外、平均臨時雇用者数)	(名)	899 (994)	902 (986)	938 (952)	922 (903)	865 (823)

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。

2 当連結会計年度より、不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法に関する会計方針の変更を行っており、前連結会計年度については遡及適用後の数値を記載しております。

なお、詳細は「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項(会計方針の変更)」に記載のとおりであります。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第78期	第79期	第80期	第81期	第82期
決算年月	2019年12月	2020年12月	2021年12月	2022年12月	2023年12月
売上高 (百万円)	23,436	22,716	22,579	22,554	24,564
経常利益又は 経常損失( ) (百万円)	398	423	566	544	490
当期純利益又は 当期純損失( ) (百万円)	414	369	746	1,047	391
資本金 (百万円)	3,305	3,305	3,305	3,305	3,305
発行済株式総数 (株)	6,929,900	6,929,900	6,929,900	6,929,900	6,929,900
純資産額 (百万円)	8,141	7,907	7,057	5,490	5,883
総資産額 (百万円)	17,387	17,453	17,035	16,275	16,906
1株当たり純資産額 (円)	1,175.83	1,142.13	1,019.39	793.03	849.74
1株当たり配当額 (円)					
(内1株当たり中間配当額) (円)	( )	( )	( )	( )	( )
1株当たり当期純利益又は1 株当たり当期純損失( ) (円)	59.83	53.34	107.81	151.30	56.56
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益 (円)					
自己資本比率 (%)	46.8	45.3	41.4	33.7	34.8
自己資本利益率 (%)	5.0	4.6	10.0	16.7	6.9
株価収益率 (倍)					11.7
配当性向 (%)					
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (名)	715 (857)	712 (840)	742 (811)	720 (768)	687 (714)
株主総利回り (比較指標：TOPIX) (%)	96.9 (115.2)	98.9 (120.8)	55.4 (133.3)	39.1 (126.6)	66.3 (158.4)
最高株価 (円)	1,060	1,010	991	575	795
最低株価 (円)	908	750	523	381	360

- (注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式がないため記載しておりません。  
2 最高株価及び最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所市場第一部におけるものであり、2022年4月4日以降は東京証券取引所スタンダード市場におけるものであります。  
3 当事業年度より、不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法に関する会計方針の変更を行っており、前事業年度については遡及適用後の数値を記載しております。  
なお、詳細は「第5 経理の状況 2 財務諸表等 (1)財務諸表 注記事項(会計方針の変更)」に記載のとおりであります。

## 2 【沿革】

当社は1961年12月1日(旧)第一屋製パン株式会社の額面を変更するため吸収合併したものであります。従って設立年月日は1947年5月16日になっておりますが、経営の主体は、従来からの(旧)第一屋製パン株式会社でありますので会社の沿革につきましても被合併会社たる(旧)第一屋製パン株式会社について記載いたします。

1947年6月	細貝義雄が東京都大田区において個人経営で「第一屋」の商号をもって製パン業を創設
1948年8月	合資会社第一屋を設立
1955年7月	各種パン類、菓子類の製造並びに販売を目的として第一屋製パン株式会社を設立
1956年6月	横浜市南区に横浜工場を新設
1957年11月	西武鉄道株式会社旭食糧工場(東京都港区)を買収し麻布工場を新設
1959年2月	三福製パン有限会社(東京都三鷹市)を買収し三鷹工場を新設
1961年12月	株式会社中屋に吸収合併(ただし社名は第一屋製パン株式会社とする)
1962年9月	株式を東京証券取引所市場第二部に上場
1963年12月	麻布工場を閉鎖
1964年1月	横浜市戸塚区に横浜工場を新設、旧横浜工場を閉鎖
1965年1月	群馬県高崎市に高崎工場を新設
1967年2月	埼玉県三郷市に金町工場を新設
1969年4月	マルエスパン株式会社(大阪府八尾市)を買収し大阪工場を新設
1969年10月	株式を大阪証券取引所市場第二部に上場
1970年11月	東京及び大阪証券取引所各市場第一部に株式上場指定替え
1972年12月	日本タンパク工業株式会社(株式会社フレッシュハウス)の全株式を取得
1973年1月	株式会社大阪木村屋の営業権を買収
1973年3月	大阪府池田市に大阪空港工場を新設
1974年4月	東京都小平市に小平工場を新設、三鷹工場を閉鎖
1974年8月	クッキー・ビスケット専門会社スリースター製菓株式会社を設立
1977年1月	金町工場敷地内に食パン工場(標準食パン専門工場)を新設
1977年7月	栃木県宇都宮市に宇都宮工場を新設
1979年4月	蒲田工場を改築し工場名を本社工場に変更
1980年4月	宮城県泉市(現仙台市泉区)の株式会社虎屋の卸部門を買収し仙台工場を開設
1980年11月	宮城県黒川郡大和町に仙台工場を新設、旧仙台工場を閉鎖
1981年12月	米国ハワイ州に現地法人ダイイチヤ・ラブスベーカリーインコーポレーテッドを設立
1987年11月	横浜工場完成(旧工場を全面建て替え)
1990年3月	米国ハワイ州において新工場(子会社に対する賃貸資産)完成
1992年4月	宇都宮工場敷地内に麺類の製造販売会社、関東大徳株式会社を設立
1995年5月	当社のインスタベーカリー部門を分離して株式会社ベーカリープチを設立
1996年4月	物流子会社株式会社ファースト・ロジスティックスを設立
2000年11月	本社移転及び本社工場閉鎖
2003年2月	千葉県松戸市に松戸工場を新設
2003年12月	大阪証券取引所市場第一部上場廃止(2003年10月当社より申請)
2007年6月	松戸工場及び株式会社フレッシュハウス三田工場をカネ美食品株式会社に事業譲渡
2007年12月	株式会社フレッシュハウスを清算終了
2008年9月	ダイイチヤ・ラブスベーカリーインコーポレーテッドの保有株式をすべて売却
2008年10月	関東大徳株式会社及びデリシャスフーズ株式会社の保有株式をすべて売却
2008年10月	宇都宮工場資産を大徳食品株式会社に売却
2008年12月	仙台工場を白石食品工業株式会社に事業譲渡
2009年5月	本社を小平市に移転
2009年12月	豊田通商株式会社と資本業務提携契約を締結
2010年1月	豊田通商株式会社に対して第三者割当増資を実施
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより市場第一部からスタンダード市場へ移行
2022年12月	横浜工場を閉鎖、株式会社ベーカリープチの事業活動を停止

### 3 【事業の内容】

当社の企業集団は、当社、連結子会社3社及びその他の関係会社1社で構成されており、パン類を中心とする食品の製造販売を主とした「食品事業」、不動産賃貸を主とした「不動産事業」を営んでおります。

以下に示す区分は、セグメントと同一の区分であります。

なお、当連結会計年度より、報告セグメントの区分を変更しております。詳細は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項(セグメント情報等)」をご参照ください。

当グループの事業に関わる位置づけは次のとおりであります。

#### 食品事業

パン部門..... 豊田通商(株)より一部原材料等を購入し、当社が製造し販売を行っております。

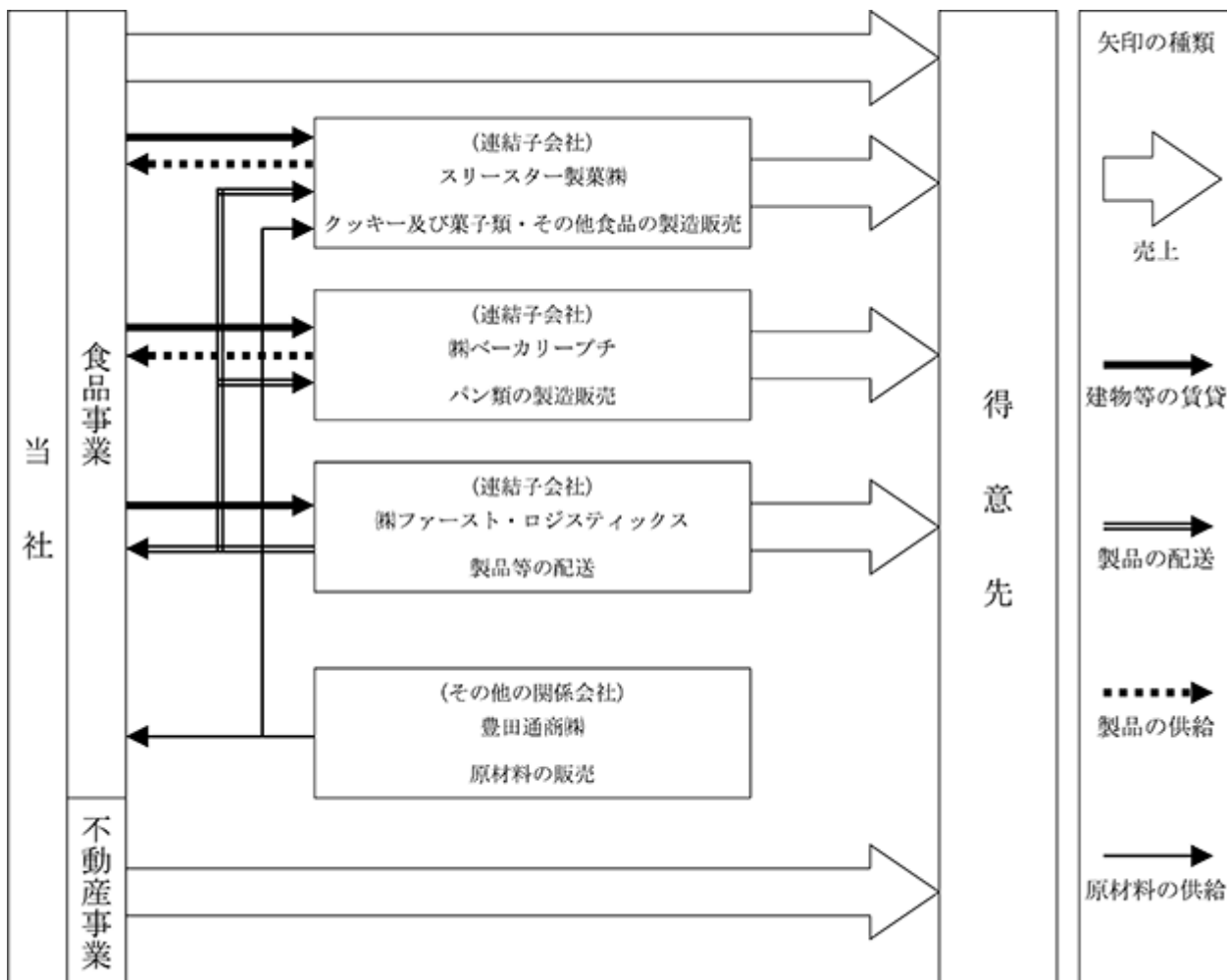
和洋菓子部門..... 豊田通商(株)より一部原材料等を購入し、当社が製造し販売を行っております。

その他..... 豊田通商(株)より一部原材料等を購入し、スリースター製菓(株)にて、クッキー等を製造し販売を行っており、(株)ファースト・ロジスティックスにて、当グループの製品等の配送を行っております。

#### 不動産事業

当社所有の土地、建物を賃貸しております。

事業の系統図は次のとおりであります。



#### 4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
(連結子会社) スリースター製菓(株) (注) 1	東京都 小平市	99	クッキー及び菓子 類・その他食品の製 造販売	100	資金の貸付、商品の購入及び建 物等の賃貸、物上保証 役員の兼任 5名
(株)ベーカリーブチ (注) 2	東京都 小平市	80	パン類の製造販売	100 (18.75)	資金の貸付及び建物等の賃貸 役員の兼任 1名
(株)ファースト・ ロジスティックス (注) 1	東京都 小平市	50	製品等の配送	100	未経過リース料期末残高に対す る連帯保証、当社及び子会社の 製品等の配送及び建物等の賃貸 役員の兼任 3名

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 被所有割合 (%)	関係内容
(その他の関係会社) 豊田通商(株)(注) 3	愛知県 名古屋市 中村区	64,936	各種物品の国内取 引、輸出入取引、外 国間取引、建設工事 請負、各種保険代理 業務等	33.48	業務提携 当社への原材料の販売

- (注) 1 上記の子会社のうちスリースター製菓(株)及び(株)ファースト・ロジスティックスは特定子会社に該当いたしません。
- 2 「議決権の所有割合」欄の( )内書は、間接所有割合であります。
- 3 豊田通商(株)は有価証券報告書の提出会社であります。
- 4 (株)ベーカリーブチは、2022年12月末をもって当社の横浜工場を閉鎖したことに伴い、事業活動を停止しております。

#### 5 【従業員の状況】

##### (1) 連結会社の状況

(2023年12月31日現在)

セグメントの名称	従業員数(名)
食品事業	865(823)
不動産事業	
合 計	865(823)

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
- 2 従業員数欄の( )外書は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
- 3 同一の従業員が複数の事業に従事しておりますので、セグメントごとの従業員数を一括して表示しております。

##### (2) 提出会社の状況

(2023年12月31日現在)

従業員数(名)	平均年齢	平均勤続年数	平均年間給与(円)
687(714)	39歳3か月	15年4か月	4,541,747

- (注) 1 従業員数は就業人員であります。
- 2 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
- 3 従業員数欄の( )外書は、臨時従業員の年間平均雇用人員であります。
- 4 同一の従業員が複数の事業に従事しておりますので、セグメント別の記載を省略しております。

##### (3) 労働組合の状況

特記すべき事項はありません。

(4)管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

提出会社

当事業年度				
管理職に占める 女性労働者の割合 (%) (注1)	男性労働者の 育児休業取得率 (%) (注2)	労働者の男女の賃金の差異(%) (注3)		
		全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者
6.40	50.00	78.44	75.94	83.11

- (注) 1 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき、当社人事制度における役割等級に基づく女性労働者の割合を算出したものであります。
- 2 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の4第1号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。
- 3 正規雇用労働者の男女賃金差異の主な要因については、男性の管理職比率が高い事によるもので、今後管理職への女性登用を推進してまいります。

連結子会社

当事業年度							
名称	管理職に 占める 女性労働者 の割合(%) (注1)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注2)			労働者の男女の賃金の差異(%)		
		全労働者	正規雇用 労働者	パート・ 有期労働者	全労働者	正規雇用 労働者	パート・ 有期労働者
スリースター製菓(株)	0.00	0.00	0.00	0.00	80.88	81.26	80.21
株ファースト・ ロジスティックス	0.00	0.00	0.00	0.00	92.58	93.88	88.87

- (注) 1 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。
- 2 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の4第1号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。
- 3 連結子会社である(株)ペーカリープチについては、事業活動を停止しており、対象となる労働者がいないため、記載を省略しております。

## 第2 【事業の状況】

### 1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末(2023年12月31日)現在において当グループが判断したものであります。

#### (1) 経営方針

当グループは、「おいしさに まごころこめて」をモットーとし、お客様の期待を超える感動をお届けすることを目指しております。

1947年創業の歴史の中で培われたパン及び菓子分野における技術力と商品力をベースにしながら、改善活動による品質向上と原価低減を図り、食を通じたお客様への価値提供に努めてまいりました。

今後とも、マーケティング力を強化し、独自技術で差別化した商品群を創造し、安全で高品質な商品作りに努め、食を通じて社会の発展に貢献してまいります。

#### (2) 経営環境

当グループの主要な事業は食品事業であり、中でもパンの製造販売が中心となります。パン市場については近年全体で1.5兆円規模の市場となっており、日本の人口の推移と相まって、長期的には縮小傾向が続くと予想されます。さらに、パン市場のうち、ホールセール市場は約1兆円規模で、上位3社が過半のシェアを持つ中、一定の市場を取り合う厳しい競争環境にあるといえます。

当連結会計年度(2023年1月1日～2023年12月31日)においては、2023年5月に新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行されたことに伴い、社会・経済活動の正常化が進み、企業活動、個人消費ともに緩やかな回復基調となりました。一方で、地政学的リスク等の影響による円安の進行や資源価格の高止まりを背景とした物価高等により先行き不透明な状況が続いております。

製パン業界におきましては、為替変動やエネルギーコスト及び原材料価格の高騰などに起因する物価上昇が継続し実質賃金を上回る状況の中、年間を通して消費者の節約志向が高まり、商品ごとの販売競争が激化することで厳しい経営環境でありました。

このような環境下において、各コストの上昇に対応するために2023年7月に一部商品の価格改定を実施したほか、2022年12月末をもって横浜工場(神奈川県横浜市)を閉鎖し、生産拠点を集約した効果も現れましたが、依然として原材料価格の高止まり、物流業界における2024年問題に関連する物流費の高騰や人件費の増加などが見込まれ、厳しい経営環境が続くものと思われまます。

#### (3) 経営戦略

当グループは、迅速な意思決定及び円滑な業務遂行を図ることを目的として、2023年1月1日付で組織変更を行いました。

これまでの本部制を廃止し、代表取締役社長及び取締役副社長直下に各部門が位置する文鎮型の組織です。中でもマーケティング部門と開発部門の連携をより一層強化し、NB商品の開発を磨いてまいります。

また、当グループの強みでもあるキャラクター商品に更に注力し、売上の拡大を図ってまいります。

中長期の視点では、パンと親和性の高い非日配品のロングライフ商品や冷凍品のジャンルといった新領域、具体的には焼き菓子や冷凍ケーキ、冷凍生地等の商品群の開発に注力し、新たな売上高の上乗せを図ってまいります。

なお、2022年12月末をもって横浜工場(神奈川県横浜市)を閉鎖し、関東の生産拠点を集約いたしました。このことが生産性の向上と競争力の強化に寄与し、当連結会計年度において集約した効果も現れております。

また、食品事業と並んで、横浜工場跡地の有効活用を始めた不動産事業にも積極的に取り組み、厳しい経営環境の中でも耐えられる収益基盤の構築、企業の安定性の確保を目指してまいります。



(4) 優先的に対処すべき事業上及び財務上の課題

当グループでは、2024年度の基本方針を「生まれ変わる(リボーン)」とし、お客様のニーズや外部環境の変化に対応するため、積極的な投資を行い、2023年度の黒字化から更なる成長を目指してまいります。

食品事業につきましては、マーケティング部門と商品開発部門の連携をより一層強化することで、NB商品のリニューアルの加速、ブランド認知度の向上を図り、売上増大を目指してまいります。

また、当社の強みであるキャラクター商品については、購入層のお客様に向けた販促企画を継続的に実施することにより、店頭での活性化を図り、販路の拡大に取り組んでまいります。

併せて、生産部門では、DPS(Daiichi-pan Production System:第一パン生産方式)の継続と積極的な設備投資による生産性の向上に取り組んでまいります。

更に、懸念される物流費の上昇に対しましては、配送コースの再編、遠方のエリアについては共同配送を推進し、経費の抑制と効率化を図ってまいります。

なお、不動産事業につきましては、2022年12月末をもって閉鎖した横浜工場跡地の賃料収入による増収が見込まれます。これにより、厳しい経営環境の中でも耐えられる収益基盤の構築、企業の安定性の確保に繋げてまいります。

(5)経営上の目標の達成状況を判断するための客観的な指標等

当社はパン製造工場を保有し、そこで生産される製品を販売すること及び、不動産物件を保有し、物件を賃貸することを主たる事業としております。この観点より、お客様への販売実績、製造原価及び販売に関わる管理費用、賃貸先への賃貸実績、賃貸に係る管理費用が収益を算定するうえでの重要項目と認識しており、これらの項目から算出される営業利益が最も重要な指標と考えております。

## 2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当グループのサステナビリティに関する考え方及び取組は、次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当グループが判断したものであります。

### (1) サステナビリティ

当グループは、「おいしさにまごころこめて」をモットーに、一人ひとりが誇りを持ち、おいしさを通じて日々の生活に寄り添うことで顧客、社会の課題解決に貢献し続けることを理念として掲げております。

顧客、社会の課題解決への対応は当グループのビジネスを継続的に運営するためにも不可欠なものと捉え、サステナビリティ課題としております。

#### ガバナンス

当グループでは、顧客、消費者、従業員から選ばれ、社会課題の解決に貢献していると認知されている企業になるため、それぞれの社会課題に対応する方策を推進しております。

当グループでは、サステナビリティに関する最高責任者を代表取締役社長としており、取締役会はサステナビリティ全般に関するリスク及び機会の監督に対する責任と権限を有しております。

なお、取締役会決議及び社長決裁となる意思決定は、経営会議等に諮問を行うこととしております。

#### リスク管理

当グループの損失の危険を含むリスクに関する統括責任部署を総務部とし、コンプライアンス委員会における報告等のリスク管理の状況について、全社的な情報共有に努め、これらの管理状況及び取組みについては、取締役会に報告しております。

### (2) 人的資本

労働安全を第一に労働環境を整備し、システム改革を含めた抜本的な働き方改革、人事制度改革を進めてまいります。そのために、公平公正な人事評価を行い、福利厚生の実施を図るとともに、会社業績に連動した社員の待遇改善、エンゲージメントを高めるための社内施策を推進してまいります。

#### 戦略

当グループにおいて求める人材像は「現状に満足せず、新しいことへのチャレンジや改善を図り、社内外のメンバーを巻き込み、高めあうことで、社会、顧客のニーズに即した商品・サービス・提供価値を模索、実現し続ける」です。そうした人材を育てること、人材育成が推進される環境を整備すること、人材の多様性を確保することに努めております。

#### a. 人材育成の方針・取組

当グループは、企業価値を最大化させる人材の育成と自己啓発やチャレンジが尊重される社風を目指しております。社員を無限の可能性を秘めた財産であると位置づけ、人材の能力開発と向上に努めることを人材育成方針として、チャレンジ精神、コミュニケーション、リーダーシップに基づき人材育成を行っております。そのような中、全部門が人材育成を部門の目標として掲げ、また、管理職は人材育成の項目を目標として掲げ、非管理職は自ら限界を作らずチャレンジする項目を目標として掲げて、人材育成を実践しております。

#### b. 女性の管理職への登用

育児休暇や時短勤務等の制度の実施を図る等、女性が活躍しやすい環境を整備し、ジェンダーの区別なく能力開発を支援し、管理職登用を行います。

#### c. 中途採用と管理職への登用

採用面では、新卒採用以外に中途採用活動についても年間を通して積極的に取り組んでおります。従前のキャリアや専門的スキル等を生かし、当グループの管理職に相応しい能力の発揮が期待される人材については管理職に登用します。

#### 指標及び目標

当グループでは、上記において記載した、人材の多様性の確保を含む人材の育成に関する方針及び社内環境整備に関する方針について、次の指標を用いております。

当該指標に関する目標及び実績は、次のとおりであります。

指標	目標	実績（当連結会計年度）
管理職に占める女性労働者の割合	2027年までに10.0%	5.9%

### 3 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、リスクの内容及び経営方針・経営戦略との関連等から、投資者の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある主な事項は以下のようなものがあります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末(2023年12月31日)現在において、当グループが判断したものであります。

#### (1) 食の安全性と品質管理について

お客様に安心して食べていただける商品を提供すべき企業として、食品の安全性と品質管理については、一般財団法人食品安全マネジメント協会が発行するJFS-B規格について、高崎、金町、小平、大阪空港の全4工場が2020年度末までにその認証を取得しました。

また、金町工場及び小平工場冷凍ケーキラインにおいては、2022年に食品安全マネジメントシステムに関する国際規格FSSC22000の認証をグループ会社であるスリースター製菓株式会社に続いて取得しています。残りのパン工場についても引き続き国際規格であるFSSC22000の取得を目指してまいります。

当グループは、取得した認証の遵守に努め、食品安全管理体制の強化を徹底させ、万全の態勢で臨んでおりますが、上記の取り組みの範疇を超えた事象が発生した場合、当グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

#### (2) 原材料の価格及びエネルギーコスト並びに運送コストの変動について

当グループにおける売上原価に占める原材料等の割合は高く、小麦粉・砂糖・油脂・鶏卵等の安定的な調達や価格の維持に極力努めておりますが、市場動向や異常気象等によりもたらされる価格高騰が、当グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

また、工場操業のエネルギーである電力・ガスの料金は製造経費に占める割合が高く、市場動向による電気代・ガス代の単価の高騰が、当グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

更に、当グループにおける販売費に占める運送コストの割合も高く、ドライバー不足や法令改正による人件費の高騰、原油高など運送コストの増大、あるいは取引先主導による配送システム的大幅な変更などにより、当グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

#### (3) 競合するパン市場について

パン業界の状況については、人口減少による需要減など市場の大きな成長が期待できない中、消費者の節約志向・低価格志向を受け、同業他社との価格競争や販売シェア獲得競争により大変厳しい状況となっております。

当グループといたしましては、業務用商品やコンビニエンスストア等の販路開拓を進めるとともに、魅力ある商品をお客様に提供できるよう競争力強化に取り組んでおりますが、他社商品との厳しい競合の結果、当グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

#### (4) 自然災害について

地震や台風等の自然災害が発生し、生産設備の破損、物流機能の麻痺等により生産拠点の操業に支障が生じた時は、他の生産拠点からの商品供給等を受ける対応をいたしますが、当グループの工場が集中している関東地区で危機管理対策の想定を超える災害が発生した場合、当グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

#### (5) 保有資産の価値変動

当グループが保有する様々な資産について、土地などの資産価値が下落することにより減損処理が必要となる場合があり、減損した場合、当グループの業績・財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

#### (6) 労働安全衛生上の問題について

当グループは人員採用・多能工化推進・労働法令遵守に努めておりますが、労働安全衛生上の問題が発生した場合、当グループの業績・信用に影響を及ぼす可能性があります。

(7) その他の主なリスクについて

当グループは日本国内で事業を展開しておりますが、以下のようなリスクがあります。  
これらの事象が発生した場合、当グループの業績に影響を及ぼす可能性があります。

- 取引先の経営破綻
- 生産設備の火災等の事故
- 各種の法的規制の改廃
- 必要物資の品不足の発生
- 過度な人材獲得難
- 外部からの賠償請求

(8) 各種リスクへの対処

当グループでは、事業等に関するリスクを経営課題と捉え、定期的に総務部長を中心にリスク管理の状況を見直しており、当社及び子会社の損失の危険を含むリスクを総括的に管理するとともに、「取締役会規則」に基づき、取締役会に報告しております。

特に、食の安全性と品質管理に係るリスクを最重点項目とし、前記食品安全管理体制の強化に加えて、全工場にて国際規格であるFSSC22000の取得を目指してまいります。

また、その他のリスクについても、管掌となる各部門にて現状をモニタリングし、対応マニュアルを整備するなどの手当をしておりますが、リスクの発生による非常事態においては、原則毎週開催している代表取締役社長、取締役副社長、経営企画室長、総務部長及び人事部長で構成される経営会議を緊急で招集するなど、経営陣が先頭に立って、リスクマネジメントを推進しております。

(9) 継続企業の前提に関する重要事象等

当社は、前連結会計年度（2022年12月期）において、以下のとおり継続企業の前提に関する重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が存在しておりました。

- ・2017年12月期より前連結会計年度まで、6期にわたり営業損失を計上していたこと
- ・2021年12月期及び前連結会計年度において、流動負債が流動資産を超過していたこと

当社は、当該状況を解消するために、生産効率の向上を目的とした横浜工場の閉鎖による関東生産拠点の集約、為替変動やエネルギーコスト及び原材料価格のコスト上昇に対応するための商品価格改定の実施、商品力・販売力の向上を目的とした主力のロングセラー商品のリニューアルやキャンペーンなどの販売促進等により、当連結会計年度において、営業利益597百万円、経常利益617百万円、親会社株主に帰属する当期純利益474百万円を計上しました。

翌連結会計年度においては、ドライバーの時間外労働の制限による物流費等の高騰やエネルギー価格の更なる高騰等のコスト増が想定されますが、関東生産拠点の集約効果や商品価格改定の効果は継続すること、DPS活動を継続し、省力化運営体制を構築するための戦略的な設備投資等を実施することで十分対応可能であることから、翌連結会計年度以降も継続して営業利益を計上できる体制となりました。

一方、当連結会計年度末日において、流動負債は7,635百万円、流動資産は7,378百万円であり、流動負債が流動資産を257百万円超過しています。翌連結会計年度中に横浜工場跡地の事業用定期借地権設定契約に伴う賃貸収入や現在検討中の保有資産の流動化により、上記の超過額を上回る収入が予定されていることから、翌連結会計年度末においては流動資産が流動負債を超過する予定です。

これらの状況により、継続企業の前提に関する重要な疑義を生じさせるような事象又は状況が解消し、継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められなくなったと判断しております。

#### 4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度の当グループに関する財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」という。）の状況の概要並びに経営者の視点による当グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は、以下のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末(2023年12月31日)現在において当グループが判断したものであります。

なお、当連結会計年度より、不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法に関する会計方針の変更を行っており、遡及処理の内容を反映させた数値で前連結会計年度との比較・分析を行っております。

詳細につきましては「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項 (会計方針の変更)」をご参照下さい。

##### (1) 財政状態の分析

###### 資産の部

当連結会計年度末の資産合計は17,730百万円となり、前連結会計年度末より654百万円増加しました。

流動資産は、現金及び預金の増加などにより、残高7,378百万円と前連結会計年度末より932百万円増加しました。

有形固定資産は、減価償却などにより、残高10,216百万円と前連結会計年度末より248百万円減少しました。

投資その他の資産は、投資有価証券の売却などにより、残高83百万円と前連結会計年度末より29百万円減少しました。

###### 負債の部

当連結会計年度末の負債合計は11,518百万円となり、前連結会計年度末より283百万円増加しました。

流動負債は、事業構造改善引当金の減少があったものの、短期借入金の増加などにより、残高7,635百万円と前連結会計年度末より10百万円減少しました。

固定負債は、長期預り金の増加などにより、残高3,883百万円と前連結会計年度末より294百万円増加しました。

###### 純資産の部

当連結会計年度末の純資産合計は6,211百万円となり、利益剰余金の増加などにより、前連結会計年度末に比べ370百万円増加しました。

##### (2) 経営成績の状況

###### 事業全体の状況

当連結会計年度（2023年1月1日～2023年12月31日）において、当社は「新しい価値、新しい第一パンを創る」を全社基本方針として掲げ、その実行のため各部門間の連携強化を図りました。特に、マーケティング部門と商品開発部門の連携を強化することで、日々変化する市場環境に対応しながら、よりお客様の目線に立った商品の開発に取り組み、主力のロングセラー商品のリニューアルやキャンペーン等の販売促進を実施し、継続的に商品力と販売力の向上に努めてまいりました。また、各コストの上昇に対応するために2023年7月に実施した一部商品の価格改定及び2022年12月末をもって横浜工場（神奈川県横浜市）を閉鎖し生産拠点を集約した効果も現れました。

当連結会計年度の業績につきましては、売上高は26,442百万円と前期末に比べ1,890百万円の増収（前期末比7.7%増）営業損益は、原材料価格の高騰や人件費が増加する状況下において、DPS（Daiichi-pan Production System：第一パン生産方式 以下「DPS活動」という）活動の継続による生産効率の向上、低採算製品の販売抑制・高採算製品の伸長、エネルギーコストの高騰影響が想定よりも低減されたことなどにより597百万円の利益（前連結会計年度は547百万円の営業損失）、経常損益は617百万円の利益（前連結会計年度は554百万円の経常損失）、親会社株主に帰属する当期純損益は474百万円の利益（前期末は1,145百万円の損失）となりました。

セグメントごとの経営成績は、次のとおりであります。

当連結会計年度より、2022年12月末をもって横浜工場（神奈川県横浜市）を閉鎖した跡地を有効活用することを契機に、従来の単一セグメントから、「食品事業」、「不動産事業」の2区分に変更しております。

なお、当連結会計年度の比較・分析は、変更後の区分に基づいております。

## 食品事業

2023年度は、既存の自社ブランド（NB）商品「大きなデニッシュ」シリーズや「ひとくちつつみ」シリーズのリニューアルを実施したほか、お客様の目線に立った話題性や季節性のある新商品を毎月発売し、それぞれの商品群で前年の売上を上回る伸長となり、当社全体の売上を牽引しました。

ハンバーガーチェーンやコーヒーチェーン向けなどの業務用食材パンにつきましても、新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴う人流の回復に加え、各チェーンの販促企画に合わせた商品の提案などにより好調に推移し、前年を上回る実績となりました。

また、2023年6月で発売25周年を迎えたテレビアニメキャラクター商品は、テレビアニメの新シリーズがスタートしたことに伴う商品のリニューアルや、発売25周年記念キャンペーンの実施等により、年間を通じて順調に売上伸長を継続しました。

以上の結果、売上高は26,280百万円（前年同期比7.8%増）、セグメント営業利益は1,691百万円（前年同期比187.4%増）となりました。

## 不動産事業

千葉県松戸市に賃貸物件を保有しており、売上高は161百万円（前年同期比 - %）、セグメント営業利益は98百万円（前年同期比19.5%減）となりました。

## 目標とする経営指標の達成状況等

当連結会計年度の売上高は26,442百万円（前連結会計年度24,552百万円）となりました。

営業損益は、原材料価格の高騰や人件費が増加する状況下において、DPS活動の継続による生産効率向上、低採算製品の販売抑制・高採算製品の伸長、エネルギーコストの高騰影響が想定よりも低減されたことなどにより、597百万円の利益（前連結会計年度547百万円の損失）を計上いたしました。

2023年度は基本方針を「新しい価値、新しい第一パンを創る」とし、を全社基本方針として掲げ、その実行のため各部門間の連携強化を図りました。特に、マーケティング部門と商品開発部門の連携を強化することで、日々変化する市場環境に対応しながら、よりお客様の目線に立った商品の開発に取り組み、主力のロングセラー商品のリニューアルやキャンペーン等の販売促進を実施し、継続的に商品力と販売力の向上に努めてまいりました。また、各コストの上昇に対応するために2023年7月に実施した一部商品の価格改定及び2022年12月末をもって横浜工場（神奈川県横浜市）を閉鎖し生産拠点を集約した効果も現れました。

引き続き原材料価格及び電気・ガス料単価の高騰は続く見込みではありますが、2024年連結会計年度においては、前期より売上高は増加するものの、各利益は減少する見通しとしております。これは、2024年問題による物流費などの高騰、人件費の増加、中長期的成長のための生産性の向上を企図した積極的な設備投資に伴う費用を見込んでいることが主要因ではありますが、売上高27,790百万円、営業利益570百万円を目指してまいります。

## (3) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下「資金」という）は、前連結会計年度末に比べ889百万円増加し、2,923百万円となりました。当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況と、それらの要因は次のとおりであります。

### 営業活動によるキャッシュ・フロー

当連結会計年度における営業活動の資金収支は、事業構造改善引当金の減少424百万円があったものの、税金等調整前当期純利益515百万円、減価償却費517百万円などにより494百万円の資金を得ることができました。

なお、前連結会計年度に比べ20百万円の収入の増加となりました。

### 投資活動によるキャッシュ・フロー

当連結会計年度における投資活動の資金収支は、有形固定資産の取得による支出311百万円、投資有価証券の売却による収入19百万円などにより304百万円の支出となりました。

なお、前連結会計年度に比べ1,092百万円の収入の減少となりました。

財務活動によるキャッシュ・フロー

当連結会計年度における財務活動の資金収支は、短期借入金400百万円の借入、預り保証金の受入れによる収入454百万円などにより698百万円の収入となりました。

なお、前連結会計年度に比べ1,242百万円の収入の増加となりました。

資本の財源及び資金の流動性に係る情報

a. 主要な資金需要

当グループの資金需要のうち主なものは、製品製造のための原材料の購入、商品の仕入、製造経費、販売費及び一般管理費等の営業経費によるものであります。営業経費の主なものは、委託運送費、広告宣伝費などであり、

また、当グループは、生産設備の合理化・更新など継続的に設備投資を実施しております。

b. 重要な資本的支出の予定

重要な資本的支出の予定はありませんが、生産設備の更新等1,176百万円の設備投資を計画しております。

これらの資金需要につきましては、自己資金、金融機関からの借入及び社債発行等による資金調達にて充当する予定であります。

(4) 生産、受注及び販売の状況

a. 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメント の名称	部門名	金額(百万円)	前年同期比(%)
食品事業	パン部門	21,508	121.3
	和洋菓子部門	4,858	119.6
	その他	1,968	105.5
	食品事業計	28,335	119.7
不動産事業		-	-
	合計	28,335	119.7

(注) 1 金額は、販売価格によっております。

b. 受注実績

当連結会計年度において受注実績は、金額に重要性がないため記載を省略しております。

c. 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメント の名称	部門名	金額(百万円)	前年同期比(%)
食品事業	パン部門	19,551	108.1
	和洋菓子部門	4,416	106.6
	その他	2,312	107.3
	食品事業計	26,280	107.8
不動産事業		161	100.0
	合計	26,442	107.7

(5) 重要な会計方針及び見積り

当グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められる会計基準に基づいて作成しております。

この連結財務諸表の作成にあたり、連結会計年度末における資産、負債の金額、及び連結会計年度における収益、費用の金額に影響を与える重要な会計方針及び各種引当金等の見積り方法（計上基準）につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。

なお、会計上の見積り及び仮定のうち重要なものは「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 (重要な会計上の見積り)」に記載しております。

5 【経営上の重要な契約等】

当グループが締結している経営上の重要な契約は、次のとおりです。

(1) コミットメントライン契約

当社は、個別相対方式によるコミットメントラインを、2024年2月7日付けで契約いたしました。詳細は「5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 (重要な後発事象)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

6 【研究開発活動】

当グループは、お客様の食生活の多様化、目まぐるしい嗜好の変化に迅速かつ的確に対応し、よりお客様のニーズに応えた商品の発売を目指して、研究開発活動を行っております。また、新商品開発や既存商品の改良の取り組みと並行して、中長期的な展望に立った企業の基盤となるようなパン生地製法の開発や食品分析等の基礎研究にも取り組んでおります。

第一パンブランドを高めるために、売り場でお客様に手を伸ばしてもらえる魅力的で説得力のある商品のパッケージデザイン・ネーミングの開発を行っております。

研究開発部門として、専従スタッフの強化と設備の充実を図り、お客様が求める・認める価値を備えた商品創りを追求し、品質の一層の向上に努め、独自性のあるこだわりを持った商品開発に取り組んでおります。

当連結会計年度中に支出した研究開発費は159百万円であります。



### 第3 【設備の状況】

#### 1 【設備投資等の概要】

当連結会計年度中に実施いたしました設備投資等の総額は311百万円であり、その主なものは食品事業に係る生産設備の更新であります。

#### 2 【主要な設備の状況】

当グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

##### (1) 提出会社

2023年12月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額(百万円)						従業員数 (名)
			建物 及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	工具、器具 及び 備品	リース 資産	土地 (面積千㎡)	合計	
高崎工場 (群馬県高崎市)	食品事業	パン及び 和洋菓子 類生産設 備	176	458	8		50 (37)	694	111 (109)
金町工場 (埼玉県三郷市)	食品事業	パン及び 和洋菓子 類生産設 備	790	724	30	97	191 (26)	1,834	141 (204)
大阪空港工場 (大阪府池田市)	食品事業	パン及び 和洋菓子 類生産設 備	219	501	13	0	728 (13)	1,463	163 (184)
小平工場 (東京都小平市)	食品事業	パン及び 和洋菓子 類生産設 備	214	508	15	1	899 (16)	1,639	140 (198)
本社 (東京都小平市)	食品事業	管理業務	157	6	12	0	126 (2)	303	114 (16)
賃貸設備 (千葉県松戸市)	不動産事業	賃貸設備	219		0		2,898 (25)	3,118	( )
賃貸設備 (横浜市戸塚区)	不動産事業	賃貸設備					239 (13)	239	( )

(注) 1 従業員数の( )は、平均臨時雇用者数を外書しております。(以下同じであります)  
2 当事業年度より、「食品事業」、「不動産事業」の2区分に変更しております。

## (2) 子会社

2023年12月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の 内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (名)	
				建物及び 構築物	機械装置 及び運搬 具	工具、器 具 及び備品	リース 資産	土地 (面積千 ㎡)		合計
スリー スター製菓 (株)	高崎工場 (群馬県 高崎市)	食品事業	クッキー 及びその 他食品生 産設備	279	314	18	5	( )	618	80 (74)

(注) 上記のほか、連結会社以外から賃借している設備として以下のものがあります。

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	年間リース料 (百万円)	従業員数 (名)	
(株)ファース ト・ロジス ティックス	本社及び営業所 (東京都小平市ほか)	食品事業	配送用車両	124	98 (35)	リース契約

## 3 【設備の新設、除却等の計画】

重要な設備の新設、除却等の計画はありません。

## 第4 【提出会社の状況】

### 1 【株式等の状況】

#### (1) 【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	13,200,000
計	13,200,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2023年12月31日)	提出日現在 発行数(株) (2024年3月28日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	6,929,900	6,929,900	東京証券取引所 (スタンダード市場)	単元株式数は、100株 であります。
計	6,929,900	6,929,900		

#### (2) 【新株予約権等の状況】

##### 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2017年7月1日	62,369	6,929		3,305		3,659

(注) 2017年3月30日開催の第75回定時株主総会において、株式併合に関する議案が承認可決されております。  
 2017年7月1日付けで普通株式10株につき1株の割合をもって株式併合を実施しております。これにより提出日  
 現在の発行済株式総数は62,369千株減少し、6,929千株となっております。

(5) 【所有者別状況】

2023年12月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)		11	23	44	36	19	6,884	7,017	
所有株式数(単元)		5,574	4,271	30,832	3,553	47	24,912	69,189	11,000
所有株式数の割合(%)		8.06	6.17	44.56	5.13	0.07	36.01	100	

(注) 1 自己株式6,469株は、「個人その他」に64単元、「単元未満株式の状況」に69株含めて記載しております。  
2 「その他の法人」の欄には証券保管振替機構名義の株式1単元が含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2023年12月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
豊田通商(株)	愛知県名古屋市中村区名駅4 9 8	2,314	33.43
MF資産管理合同会社	東京都大田区	300	4.33
細貝理栄	東京都大田区	294	4.26
(株)みずほ銀行	東京都千代田区大手町1-5-5	237	3.44
日本マスタートラスト信託銀行(株)(信託口)	東京都港区浜松町2-11-3	206	2.98
昭和産業(株)	東京都千代田区内神田2-2-1	145	2.10
(株)ニッポン	東京都千代田区麹町4-8	142	2.05
楽天証券(株)	東京都港区南青山2-6-21	141	2.05
(株)SBI証券	東京都港区六本木1-6-1	79	1.14
細貝智博	東京都世田谷区	64	0.93
計		3,927	56.73

## (7) 【議決権の状況】

## 【発行済株式】

2023年12月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 6,400		
完全議決権株式(その他)	普通株式 6,912,500	69,125	
単元未満株式	普通株式 11,000		
発行済株式総数	6,929,900		
総株主の議決権		69,125	

(注) 1 「完全議決権株式(その他)」の欄には、証券保管振替機構名義の株式100株(議決権1個)が含まれておりません。

2 「単元未満株式」には当社所有の自己株式69株が含まれております。

## 【自己株式等】

2023年12月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式 総数に対する 所有株式数 の割合(%)
(自己保有株式) 第一屋製パン株式会社	東京都小平市小川東町 3 6 1	6,400		6,400	0.09
計		6,400		6,400	0.09

## 2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(千円)
当事業年度における取得自己株式	35	13
当期間における取得自己株式	20	12

(注) 当期間における取得自己株式には、2024年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(千円)	株式数(株)	処分価額の総額(千円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他				
保有自己株式数	6,469		6,489	

(注) 当期間における保有自己株式には、2024年3月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取による株式数は含まれておりません。

## 3 【配当政策】

当社は、従来より株主への利益還元を重要な課題とし、業績に対応した配当を行うことを基本としております。

また、当社の剰余金の配当については、定款において中間配当を行うことができる旨を定め、中間配当及び期末配当の年2回とし、その決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当事業年度につきましては、今後の安定的な経営のために手元資金を確保し、内部留保の充実を図ることが最重要課題であると考え、現状の業績数値や今後の業績見通しを総合的に勘案し、誠に遺憾ながら無配といたしました。

今後の利益還元につきましては、経営成績を勘案しながら、適宜検討していく予定であります。

## 4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

## (1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、当グループの企業理念として、「『おいしさに まごころこめて』をグループ全社のモットーとし、安全で高品質な商品作りに努め、食を通じて社会の発展に貢献します」を掲げております。

当社はこの企業理念に基づき、株主をはじめとしたステークホルダーの期待に応え、持続的な成長と中長期的な企業価値の向上の実現を図るためには、コーポレート・ガバナンス体制の強化・充実が重要であると考えており、経営の透明性を高め、内部統制の仕組み、コンプライアンス体制の充実を図ってまいります。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

## a. 企業統治の体制の概要

当社は、監査役会設置会社制度を採用しております。また、迅速な意思決定及び円滑な業務遂行を図ることを目的として、2023年1月1日より従来の本部制を廃止して代表取締役社長及び取締役副社長直下に各部門が位置する文鎮型の組織に変更し、経営管理体制の整備に取り組んでおります。

現在の経営管理体制は、以下のとおりであります。

## [取締役会]

当社の取締役会は、取締役7名（うち、非常勤社外取締役4名）で構成されており、議長は代表取締役社長が務め、監査役3名（うち、社外監査役2名）が常時出席し、当グループにかかる経営の基本方針と戦略の決定等の業務執行に関する重要な事項を審議し、取締役の職務の執行を監督しております。また、必要に応じて各部門に關係する執行役員が陪席し、執行状況を報告しております。

開催頻度は原則月1回とし、必要に応じて臨時取締役会を開催しております。

本有価証券報告書提出日現在、構成員である社外取締役4名のうち2名は、東京証券取引所が定める独立性基準を満たした独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。

なお、取締役の任期は2年です。

当事業年度において、当社は取締役会を14回開催し、主に中長期視点の経営課題、事業戦略及び人事・組織体制等の重要な執行課題につき検討しました。

また、各取締役及び監査役の取締役会への出席状況は以下のとおりであります。

役 職 名	氏 名	開催回数	出席回数	出席率(%)
代表取締役社長	細 貝 正 統	14	14	100.00
取締役副社長	小 山 一 郎	14	14	100.00
取 締 役	米 田 步	10	10	100.00
社外取締役	結 城 義 晴	14	12	85.71
社外取締役	森 拓 也	14	11	78.57
社外取締役	南 浩 二	10	9	90.00
常勤社外監査役	家 城 裕	14	14	100.00
社外監査役	川 村 竜 也	14	14	100.00
監 査 役	小 室 英 夫	14	14	100.00

(注) 1 開催回数が異なるのは、就任時期の違いによるものであり、米田 歩及び南 浩二の両氏は、2023年3月30日開催の第81回定時株主総会において新たに選任され就任しました。

2 2023年3月30日開催の第81回定時株主総会終結の時をもって任期満了により退任した取締役名誉会長細貝理栄、社外取締役加藤茂治及び社外監査役田櫓孝次の3氏が退任するまでの取締役会開催回数は4回であり、細貝理栄及び田櫓孝次の両氏は共に4回中4回出席（出席率100.00%）、加藤茂治氏は4回中3回出席（出席率75.00%）しております。

[監査役会]

当社の監査役会は、常勤社外監査役1名のほか、非常勤監査役2名（うち、非常勤社外監査役1名）で構成されており、監査方針及び監査計画等に従い、取締役会等の重要会議への出席、重要書類の閲覧、業務及び財産の状況の調査などを実施して、取締役の職務につき厳正な監査を行っております。

なお、当事業年度における監査役及び監査役会の活動状況等については、後記「(3) 監査の状況」に記載のとおりであります。

[経営会議]

当社の経営会議は、代表取締役社長、取締役副社長、経営企画室長、総務部長及び人事部長で構成されており、原則毎週1回開催し、取締役会で決定した方針の徹底を図るとともに、当社の業務執行に関する重要な事項を審議する体制をとっております。

なお、監査役は出席して意見を述べるができることとしております。

また、代表取締役社長は、必要に応じて、構成員以外で審議事項及び報告事項に関係する部門長（部長・室長・工場長）、社外取締役及び社外監査役等を出席させることができることとしております。

当事業年度において、当社は経営会議を47回開催しました。

[人事委員会（任意の委員会）]

当社の人事委員会は、当グループの人事に関する重要な事項（経営陣幹部の選任・解任、役員候補者の指名及び報酬等）について公正性・透明性・客観性を確保し、コーポレート・ガバナンスの充実を図るため、代表取締役社長の諮問機関として適切な審議を行い、出席した構成員の過半数をもって、社長決裁又は取締役会決議もしくは取締役会報告への報告を決定しております。

当事業年度において、当社は人事委員会を36回開催し、主に当グループにおける役員候補者の指名及び報酬、経営陣幹部の選任及びコンプライアンスに関連する事項等の人事全般に関連する重要事項につき検討しました。

本有価証券報告書提出日現在の構成員及び人事委員会への出席状況は以下のとおりであります。

なお、家城 裕（常勤監査役/独立社外監査役）は、本委員会に出席して意見を述べております。

また、代表取締役社長は、必要に応じて、構成員以外で審議事項及び報告事項に関係する部門長（部長・室長・工場長）、社外取締役及び社外監査役等を出席させることができることとしております。

役 職 名	氏 名	開催回数	出席回数	出席率(%)
代表取締役社長	細 貝 正 統	36	36	100.00
取締役副社長	小 山 一 郎	36	36	100.00
執行役員総務部長	矢 野 邦 彦	36	36	100.00
執行役員人事部長（議長）	木 村 和 也	36	36	100.00

（注）2023年3月31日付にて退任した執行役員経営企画室長伊藤貴之氏が退任するまでの人事委員会開催回数は9回であり、同氏は9回中6回出席（出席率66.67%）しております。

[企画財務委員会（任意の委員会）]

当社の企画財務委員会は、当グループの企画財務に関する政策的な重要事項について公正性・透明性・客観性を確保し、コーポレート・ガバナンスの充実を図るため、代表取締役社長の諮問機関として適切な審議を行い、出席した構成員の過半数をもって、社長決裁又は取締役会決議もしくは取締役会報告への報告を決定しております。

当事業年度において、当社は企画財務委員会を17回開催しました。

本有価証券報告書提出日現在の構成員は、以下のとおりであります。

なお、家城 裕（常勤監査役/独立社外監査役）は、本委員会に出席して意見を述べております。

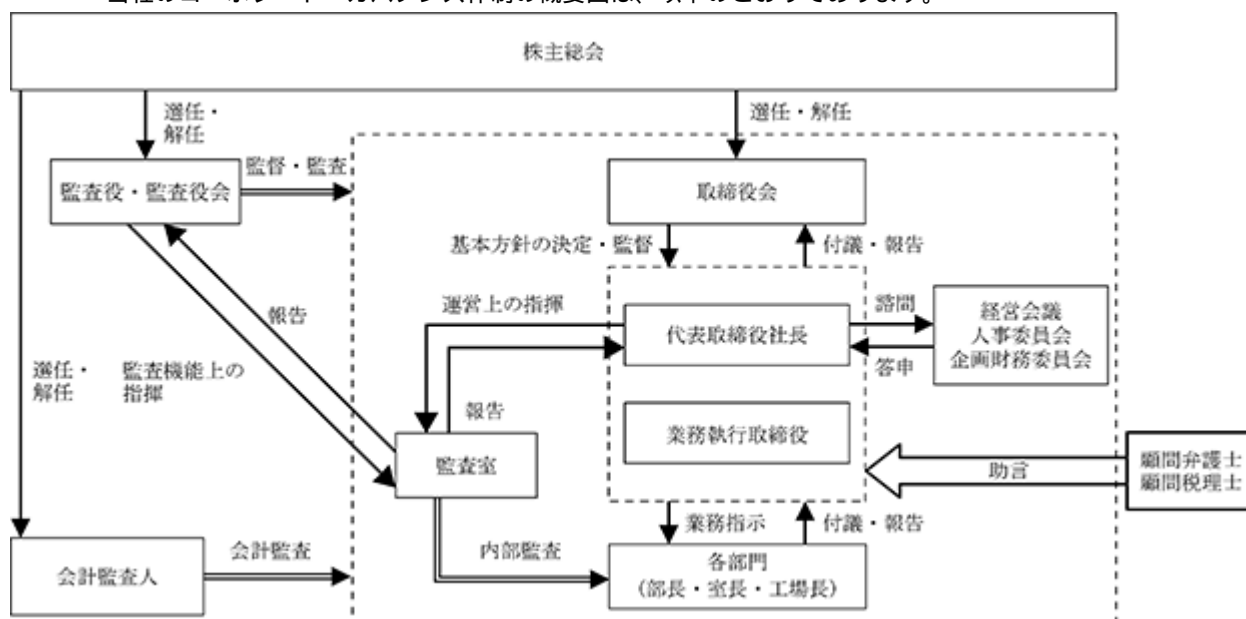
構成員：代表取締役社長 細貝正統、取締役副社長 小山一郎、執行役員経営企画室長 川崎由実子  
及び 経理部長（議長） 伊藤 健

また、代表取締役社長は、必要に応じて、構成員以外で審議事項及び報告事項に関係する部門長（部長・室長・工場長）、社外取締役及び社外監査役等を出席させることができることとしております。



当社は、市場の動向にすばやく対応する必要があるため、上記以外にも随時、業務執行取締役、部長、室長及び工場長が出席する各種会議を開催し、業務運営上必要な事項について迅速な処置・決定を行う体制を取っております。

当社のコーポレート・ガバナンス体制の概要図は、以下のとおりであります。



b. 上記企業統治体制を採用する理由

経営環境の変化に対応して迅速な意思決定を行うことが市場のニーズに応えることであり、延いては経営成果を取り込むことに繋がるとの観点から、意思決定プロセスの簡素化等を図り、少人数による取締役会においてスピード感のある経営方針の意思決定を可能とする体制にしております。

また、社外取締役4名(うち、独立役員2名)の選任により、経営判断が会社内部者の論理に偏ることがないよう、中立の立場から経営を監視していただくことにより、経営の意思決定に係る健全性や合理性を確保されるとともに、社外監査役2名(うち、独立役員1名)を含む3名で構成される監査役会の経営監視機能が十分に発揮されることにより、透明度の高い経営が確保されるものと考えられることから、現状の企業統治体制を採用しております。

企業統治に関するその他の事項

a. 内部統制システムの整備及び運用の状況

当グループは、「おいしさに まごころこめて」という基本精神のもと、社会からの信頼を得ることの重要性を認識し、適法・適正かつ効率的な事業活動を実行するため、会社法及び会社法施行規則に定める「業務の適正を確保するための体制」について、取締役会における決議により、「内部統制システムの基本方針」を定めております。

その内容は次のとおりであります。

・当社及び当社子会社(以下「当グループ」という。)の取締役・従業員の職務執行が法令・定款に適合することを確保するための体制

( i ) 当グループは、「第一屋製パングループ行動指針」を定め、代表取締役社長をはじめとする取締役・部長・室長・工場長等が、繰り返しその精神を当グループの従業員に伝えることにより、法令及び社会倫理の遵守を企業活動の前提とすることを徹底する。

( ) 当社は、最高コンプライアンス責任者を代表取締役社長とし、当グループ全体のコンプライアンス体制の整備及び問題点の把握に努める。

また、最高コンプライアンス責任者を委員長とするコンプライアンス委員会を設置し、各事業部門固有のコンプライアンスリスクを分析して当グループにおけるコンプライアンスに係る諸施策を継続して実施するとともに、コンプライアンス上の重要な問題を審議し、その結果を適宜取締役会に報告する。

- ( ) 企業を取巻く各種のリスクに迅速かつ確に対処するため、当グループの取締役及び従業員は、「第一屋製パングループホットライン」をもって直接報告することを可能とする。  
なお、報告・通報を受けた総務部は、その内容を調査し、コンプライアンス委員会に報告する。
- ( ) 取締役及び従業員の法令・定款違反について、総務部から報告を受けたコンプライアンス委員会は、人事委員会の諮問を受ける。また、代表取締役社長は、重要性に応じて取締役会に報告する。
- ( ) 当グループは、反社会的勢力とは取引を含む一切の関係を持たないこととし、社内研修等を通じてその趣旨を当グループの取締役及び従業員に周知徹底する。  
なお、反社会的勢力に関する諸対応は、総務部が所管し、公益社団法人警視庁管内特殊暴力防止対策連合会に加盟して情報収集に努めるほか、積極的に警察や弁護士等の外部機関との連携を図り、反社会的勢力との取引等の未然防止に努める。

.当社取締役の職務執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- ( i ) 当社は、取締役の職務執行に係る情報の保存及び管理について、その責任者を総務部長とし、情報管理に関する基本方針のもと、文書管理規定に従い、職務執行に係る情報を文書又は電磁的媒体に記録して保存及び管理する。
- ( ) 取締役及び監査役は、これらの文書を随時閲覧できるものとする。

.当グループの損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ( i ) 当社は、総務部長を当グループの損失の危険を含むリスクに関する統括責任者とし、総務部において当グループ全体のリスクを総括のうえ管理する。  
また、各リスクにそれぞれ関係する部署は、「経営会議規則」に基づき、当グループのリスク管理の状況を総務部長に報告する。
- ( ) 総務部長は、半期毎に取締役会に報告する。
- ( ) 内部監査部門は、当グループ各社毎のリスク管理の状況を監査し、その結果を定期的に総務部長及び取締役会に報告する。
- ( ) 取締役会は、必要に応じて改善策を審議・決定する。

.当グループの取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

当グループの取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するため、以下の事項を実施する。

- ( i ) 職務権限・意思決定ルール の策定
- ( ) 役員及び執行役員による定例会議を原則、週1回開催
- ( ) 取締役会による当グループの中期経営計画の策定、中期経営計画に基づく事業部門毎の業績目標と予算の設定及びITを活用した月次・四半期業績管理の実施
- ( ) 取締役会による当グループの月次業績の検証及び改善策の実施

.当グループにおける業務の適正を確保するための体制

- ( i ) 当グループにおける業務の適正を確保するため、内部統制に関する担当部門を当社総務部とし、当社と子会社各社との間で内部統制に関する協議、情報の共有化、指示・要請の伝達等が効率的に行われる仕組みを含む体制を構築・運営する。
- ( ) 当グループ各社の代表取締役社長をはじめとする取締役は、各部門における業務執行の適正を確保するため、内部統制の確立と運用の権限及び責任を有する。
- ( ) 当社の監査室は、当グループ各社の内部監査を実施し、その結果を当社総務部長及び担当部門の責任者に報告する。報告を受けた総務部長及び担当部門の責任者は、必要に応じて内部統制に係る改善策を指導し、実施にあたっての支援・助言を行う。  
また、監査役は、会計監査人との緊密な連携により、財務の適正を確保する。
- ( ) 当グループにおける財務報告の信頼性を確保するため、内部統制に係る報告体制を構築し、その有効かつ効率的な運用及び評価を行う。

. 監査役がその職務を補助すべき従業員（以下「監査役スタッフ」という。）を置くことを求めた場合における当該監査役スタッフに関する事項

当社は、監査役から要望があった場合は、「監査役監査基準」に基づき、速やかに監査役の職務を補助するための人員として監査役スタッフを設置する。

. 監査役スタッフの取締役からの独立性及び当該監査役スタッフに対する指示の実効性の確保に関する事項

- ( i ) 監査役スタッフは、監査役の指揮命令下で業務を行い、監査役以外の者からの指揮命令は受けないものとし、取締役からの独立性を確保する。
- ( ) 監査役スタッフの任命、異動、評価等の人事権に係る事項の決定においては、常勤監査役の事前の同意を得ることとする。

. 当社の監査役に報告するための体制

- ( i ) 当社は、監査役会と協議のうえ、監査役会に報告すべき事項を定める規定を制定し、取締役は、次の事項を報告する。
  - イ．会議で決議された重要な事項
  - ロ．会社に著しい損害を及ぼすおそれのある事項
  - ハ．毎月の経営状況として重要な事項
  - ニ．内部監査状況及びリスク管理に関する重要な事項
  - ホ．重大な法令・定款違反
  - ヘ．「第一屋製パングループホットライン」の通報状況及び内容
  - ト．その他コンプライアンス上の重要な事項
- ( ) 当グループの取締役及び従業員は、法令等の違反行為等、当社に著しい損害を及ぼす恐れのある事実を発見した場合は、監査役に直接報告することができる。
- ( ) 当社は、当社の監査役に報告した当グループの取締役及び従業員が当該報告をしたことを理由として不利な取り扱いを受けることがない体制を整え、その旨を当グループの取締役及び従業員に周知徹底する。

. 監査役職務の執行について生ずる費用の前払い又は償還の手続きその他の当該職務の執行について生ずる費用又は償還の処理に係る方針に関する事項

当社は、当社の監査役からその職務の執行に係る費用の前払い又は償還の請求をされたときは、担当部署において審議のうえ、当該請求に係る費用又は債務が当該監査役の職務執行上必要ではないと認められる場合を除き、速やかにこれに応じるものとする。

. その他監査役会の監査が実効的に行われることを確保するための体制

- ( i ) 代表取締役は、監査役会に対して、業務執行状況を報告する機会を設けるなどして、監査役と定期的に意見交換を行うものとする。
- ( ) 取締役会は、業務の適正を確保するため、重要な業務執行に係る会議に対する監査役の出席を確保する。
- ( ) 当社は、監査役が独自に弁護士との顧問契約を締結すること、又は、必要に応じて専門の弁護士、公認会計士等の助言を受ける機会を確保する。

当社は、以上の方針に基づき、当事業年度における整備・運用状況に関する評価を実施し、本システムが基本方針に基づき適切に整備され運用されていることを取締役会において確認しました。

その概要は次のとおりであります。

- ・当グループの内部統制システム全般の整備・運用状況については、当社の監査室が内部監査計画に基づき当グループ各社の内部監査を実施し、本システムの実効性を確保しております。

・当社は、原則、毎月1回開催されるコンプライアンス委員会における報告等のリスク管理の状況について、全社的な情報共有に努めており、これらの管理状況及び取り組みについては、取締役会において年2回報告しております。

また、「第一屋製パングループホットライン」を設置し、当グループ各社に開放することでコンプライアンスの実効性の向上を図っております。また、当グループの企画財務に関する政策的重要事項については、取締役会に先立ち、全17回開催された企画財務委員会において適切な審議を行い、業務の適正を確保しております。

・監査役は、監査役会において定めた監査計画に基づき監査を行うとともに、当社代表取締役社長をはじめとする取締役、監査室、会計監査人との間で意見交換を実施し、情報交換等の連携を図ることにより、監査の実効性を確保しております。

#### b. リスク管理体制の整備及び運用の状況

「経営会議規則」において、リスク管理の状況は報告事項である旨が定められております。したがって、定期的に総務部長を中心にリスク管理の状況を見直し、当社及び子会社の損失の危険を含むリスクを総括的に管理するとともに、「取締役会規則」に基づき、取締役会に報告しております。

#### c. 責任限定契約の内容の概要

当社は、会社法第427条第1項の規定に基づき、社外取締役及び社外監査役との間において、会社法第423条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結することができます。

当社と取締役結城義晴、南 浩二、長谷川千鶴及び貝沼利晃、常勤監査役家城 裕並びに監査役川村竜也の6氏とは、会社法第423条第1項の責任について、その職務を行うにつき善意でありかつ重大な過失がなかったときは、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額を限度として損害賠償責任を負担するものとする旨の責任限定契約を締結しております。

#### d. 役員等賠償責任保険契約の内容の概要

当社は、保険会社との間で会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を締結しております。当該保険契約の被保険者の範囲は、当社及び当社の子会社であるスリースター製菓株式会社並びに株式会社ファースト・ロジスティックスの取締役、監査役、執行役員及び管理職従業員であり、被保険者は保険料を負担しておりません。当該保険契約により、保険期間中に被保険者に対して提起された損害賠償請求に係る訴訟費用及び損害賠償金等が填補されることとなります。

但し、被保険者の職務の執行の適正性が損なわれないようにするため、当該被保険者が法令違反の行為であることを認識して行った行為に起因して生じた損害は填補されないなど、一定の免責事由があります。

なお、保険料は総資産合計金額に占める当社及び当社の子会社各社の総資産金額の割合にて按分負担しております。

#### e. 取締役の定数

当社の取締役は12名以内とする旨を定款に定めております。

#### f. 取締役の資格制限

該当事項はありません。

#### g. 取締役の選任の決議要件

当社は、取締役の選任決議は、株主総会において、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び選任決議は、累積投票によらない旨を定款に定めております。

h. 取締役会で決定できる株主総会決議事項

当社は、会社法第454条第5項の定めに基づき、機動的な配当政策を遂行できるよう、取締役会の決議によって毎年6月30日を基準日として中間配当を行うことができる旨を定款に定めております。

i. 取締役会決議事項を株主総会では決議できない旨の定款の定め

該当事項はありません。

j. 株主総会の特別決議要件

当社は、株主総会の円滑な運営を行うことを目的として、会社法第309条第2項に定める特別決議について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

男性9名 女性1名 (役員のうち女性の比率10%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数(千株)
代表取締役社長	細貝 正統	1975年5月2日生	1998年4月 (株)第一勧業銀行(現(株)みずほ銀行)入行 2003年10月 当社入社 2007年1月 当社管理本部部長付兼経営改善プロジェクトリーダー 2007年3月 当社執行役員経営改善プロジェクトリーダー 2007年12月 当社執行役員経営企画室室長兼経営改善プロジェクトリーダー 2009年3月 当社取締役経営企画室室長兼経営改善プロジェクトリーダー 2010年3月 当社常務取締役管理本部部長 2011年1月 当社常務取締役営業本部部長 2011年3月 (株)ベーカリープチ代表取締役専務 2013年1月 当社常務取締役コーポレート本部部長兼経理部部長 2013年12月 スリースター製菓(株)取締役 2014年1月 同社代表取締役社長 2015年1月 当社常務取締役社長特命事項担当 2018年7月 MF資産管理合同会社代表社員(現任) 2019年1月 当社代表取締役社長(現任) 2023年1月 スリースター製菓(株)代表取締役会長(現任) 2023年2月 (株)ベーカリープチ代表取締役社長(現任)	2025年3月まで(1年)	37
取締役副社長	小山 一郎	1970年10月28日生	1993年4月 (株)トーメン(現豊田通商(株))入社 2012年4月 豊田通商(株)食品部製菓原料グループリーダー 2015年4月 同社大阪食料部大阪食糧グループリーダー 2018年4月 同社大阪食料部長 2020年3月 当社社長付 2020年3月 当社取締役 2020年3月 スリースター製菓(株)取締役(現任) 2020年3月 (株)ファースト・ロジスティックス取締役(現任) 2021年1月 当社取締役副社長(現任) 2023年1月 当社営業企画部部長	2025年3月まで(1年)	
取締役	米田 歩	1961年8月2日生	1986年4月 当社入社 2010年6月 当社高崎工場工場長 2011年1月 当社生産本部高崎工場工場長 2011年4月 当社生産本部金町工場工場長 2013年1月 当社商品本部商品開発部部長 2014年1月 当社執行役員商品本部部長 2018年1月 当社執行役員生産本部部長 2018年2月 (株)ベーカリープチ取締役 2019年1月 当社執行役員商品本部部長 2019年4月 当社執行役員商品本部部長兼新領域・研究開発部部長 2020年4月 当社執行役員商品本部部長兼購買部部長 2023年1月 スリースター製菓(株)代表取締役社長(現任) 2023年3月 当社取締役(現任)	2025年3月まで(1年)	0

役職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数(千株)
取締役	結城 義晴	1952年9月2日生	1977年4月 1989年1月 1996年8月 2002年8月 2003年8月 2008年2月 2008年6月 2009年4月 2015年3月 2016年4月	(株)商業界入社 同社食品商業編集長 同社取締役編集担当 同社専務取締役編集統括 同社代表取締役社長 (株)商人舎設立、同社代表取締役社長(現任) (株)True Data取締役(現任) 立教大学大学院ビジネスデザイン研究科教授 当社取締役(現任) 学習院マネジメントスクール顧問	2025年3月まで(1年)	
取締役	南 浩二	1968年8月2日生	1992年4月 2000年4月 2014年4月 2017年4月 2018年1月 2018年4月 2019年4月 2023年3月 2023年4月	豊田通商(株)入社 豊田通商マレーシア社社長 豊田通商(株)国内地域・顧客統括部トヨタBU室長 同社ネクストモビリティ推進部長 CFAO社副社長 豊田通商(株)執行役員アフリカ本部COO 同社執行幹部アフリカ本部COO 当社取締役(現任) 豊田通商(株)食料・生活産業本部COO(現任)	2025年3月まで(1年)	
取締役	長谷川千鶴	1983年11月17日生	2010年12月 2011年1月 2018年4月 2020年1月 2024年3月	司法修習終了(63期)・弁護士登録 弁護士法人御堂筋法律事務所 入所 同所(東京事務所) 同所 パートナー弁護士(現任) 当社取締役(現任)	2025年3月まで(1年)	
取締役	貝沼 利晃	1974年3月7日生	1998年4月 2003年4月 2014年4月 2016年4月 2022年4月 2024年3月	(株)トーマン(現豊田通商(株))入社 Tomen America, Chicago(現Toyota Tsusho America, Inc.) マネージャー Toyota Tsusho Malaysia, Kuala Lumpur 副部長 豊田通商株式会社穀物第一部 穀物第一グループ グループリーダー 同社経営企画部戦略企画グループ部長職(現任) 当社取締役(現任)	2025年3月まで(1年)	
常勤監査役	家城 裕	1963年7月11日生	1987年4月 2010年4月 2012年7月 2013年7月 2017年10月 2018年7月 2020年3月 2020年3月 2020年3月 2020年3月	(株)第一勧業銀行(現(株)みずほ銀行)入行 (株)みずほコーポレート銀行(現(株)みずほ銀行)コンプライアンス統括部コンフリクトマネジメント室長 同行監査役室長 (株)みずほ銀行監査役室長 同行神田支店神田第一部付参事役 学校法人佐野学園関連事業部付部長 当社常勤監査役(現任) スリースター製菓(株)監査役(現任) (株)ベーカリープチ監査役 (株)ファースト・ロジスティックス監査役(現任)	2028年3月まで(4年)	

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
監査役	川村 竜也	1967年5月19日生	1993年4月 ㈱トーメン(現豊田通商㈱)入社 2011年4月 豊田通商㈱営業経理部名古屋経理第一グループリーダー 2012年4月 同社営業経理部名古屋経理第二グループリーダー 2014年4月 同社経理部税務企画グループリーダー 2018年4月 豊田通商インドネシア社(ジャカルタ) CFO 2022年3月 当社監査役(現任) 2022年6月 豊通食料㈱取締役(現任) クレドル食品㈱監査役(現任) 2022年7月 豊通食料㈱コーポレート本部長(現任)	2028年 3月まで (4年)	
監査役	小室 英夫	1954年12月19日生	1977年4月 当社入社 2011年3月 当社執行役員関西統括本部本部長 2012年4月 当社執行役員商品本部本部長 2013年3月 当社取締役営業本部本部長 2013年3月 ㈱ファースト・ロジスティックス取締役 2015年1月 当社取締役コーポレート本部本部長兼経理部部長 2015年3月 ㈱ベーカリーブチ取締役 2015年10月 当社取締役コーポレート本部本部長 2018年3月 当社執行役員コーポレート本部本部長 2019年1月 当社執行役員関西統括本部本部長 2022年1月 当社社長付 2022年2月 スリースター製菓㈱監査役(現任) 2022年2月 ㈱ファースト・ロジスティックス監査役(現任) 2022年2月 ベーカリーブチ監査役 2022年3月 当社監査役(現任)	2027年 3月まで (3年)	2
計					39

- (注) 1 取締役結城義晴、南 浩二、長谷川千鶴及び貝沼利晃の4氏は、社外取締役であります。  
2 常勤監査役家城 裕及び監査役川村竜也の2氏は、社外監査役であります。  
3 当社は、法令に定める監査役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項に定める補欠監査役1名を選任しております。補欠監査役の略歴は次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (千株)
谷垣 岳人	1964年1月28日生	1992年4月 弁護士登録・第二東京弁護士会入会 石井法律事務所 パートナー弁護士(現任) 2000年6月 金融監督庁(現金融庁)検査局専門検査官 2016年6月 太陽生命保険㈱監査役(現任) 2019年6月 ㈱富山第一銀行取締役(現任)	

なお、補欠監査役谷垣岳人は社外監査役の要件を満たしております。

- 4 所有株式数には、第一屋製パングループ役員持株会の自己持分数を含んでおります。

#### 社外役員の状況

##### a. 員数及び会社との利害関係

当社の社外取締役は4名、社外監査役は2名であります。

社外取締役の南 浩二は豊田通商株式会社食料・生活産業本部C00に、貝沼利晃は同社経営企画部戦略企画グループ部長職にそれぞれ就任しております。

社外監査役の川村竜也は、豊田通商株式会社のグループ企業である豊通食料株式会社取締役コーポレート本部長に就任しております。

なお、豊田通商株式会社は当社の主要株主及びその他の関係会社であり、当社は同社と業務提携、原材料の購入がありますが、原材料の購入については市場の実勢価格を勘案して合理的に決定しております。



社外取締役の結城義晴は、株式会社商人舎代表取締役社長、株式会社True Data取締役役に就任しておりますが、いずれも当社との間には特別な関係はありません。

社外取締役の長谷川千鶴がパートナー弁護士を務める弁護士法人御堂筋法律事務所は、豊田通商株式会社との間に法律顧問契約に基づく取引がありますが、当社との間には特別な関係はありません。

社外監査役（常勤監査役）の家城 裕は、2007年8月から2018年6月までの間、株式会社みずほ銀行に在職しておりました。株式会社みずほ銀行監査役室長をしておりましたが、その後は銀行を離れ、当社との間には特別な関係はありません。また、当社の100%子会社であるスリースター製菓株式会社及び株式会社ファースト・ロジスティックスの監査役にも就任しております。

なお、社外取締役の結城義晴、長谷川千鶴及び社外監査役（常勤監査役）の家城 裕は、東京証券取引所所有価証券上場規程に定める独立役員として指定し、同取引所に届け出ております。

#### b. 企業統治において果たす機能、役割及び選任状況に関する考え

当社は、企業経営に対する監視機能を充実することが重要と考え、社外取締役及び社外監査役を選任しております。

社外取締役は、食品事業に関連する専門的な知識をはじめ、企業経営などの豊富な経験に基づき、法令を含む企業社会全体を踏まえた客観的な視点に立ち、実効性の高い経営の監督を担っております。

また、社外監査役は、取締役会の中で管理全般にわたる幅広い見識と豊富な経験に基づき、経営陣とは独立した中立な立場からの確かな指摘、助言等により経営を監視し、経営の効率性及び透明性の向上を図っております。

社外取締役及び社外監査役の機能と役割が有機的に連携される選任状況にあり、企業価値の向上と持続的な成長に資するものとなっております。

#### c. 当社からの独立性に関する基準又は方針の内容

東京証券取引所の定める独立性基準を踏まえ、社外取締役及び社外監査役を選任するに際しての当社からの独立性に関する判断基準等を定めております。形式的な独立性だけでなく、取締役会においても建設的な助言・提言ができるという実質面を重視しております。

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役は取締役会へ出席し、取締役会の意思決定の妥当性・適正性を確保するための指摘・提言を行っており、社外監査役は、取締役会へ出席して客観的・専門的見地からの意見を述べるなどして、社外取締役・社外監査役に期待される役割を果たしております。

監査役は、監査役会で定めた監査方針・監査計画に従い、重要な会議への出席、重要書類の閲覧及び事業所の往査等を実施しているほか、会計監査人及び内部監査部門の監査室との意見交換などにより連携の強化を図るなどで実効性のある監査により、ガバナンスの実施状況の監視、取締役の職務執行状況の監査に努めております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

a. 監査役監査の組織、人員及び手続

- ・当社は監査役会設置会社であり、常勤社外監査役1名と、非常勤の社内監査役1名、社外監査役1名の計3名から構成されております。監査役会議長は常勤社外監査役が務めております。各人の経歴等は下表のとおりです。

役職名	氏名	経歴等
常勤社外監査役	家 城 裕	金融機関における経験から、金融知識、コンプライアンス、財務及び会計に相当程度の知見を有しております。
非常勤社外監査役	川 村 竜 也	総合商社における経理、財務等の管理全般の経験があり、財務及び会計に相当程度の知見を有しております。
非常勤社内監査役	小 室 英 夫	当社コーポレート本部の責任者を務めるなど、当グループの組織及び業務プロセスに精通しており、財務及び会計に相当程度の知見を有しております。

- ・年初に監査計画として定める監査方針や重点監査項目に従い、重要な会議出席、報告聴取、重要な決裁書類閲覧、工場往査により監査を行っております。

b. 監査役及び監査役会の活動状況

- ・監査役会の出席状況等は以下のとおりであります。当事業年度に開催された監査役会の一回当たりの所要時間は40分程度です。

役職名	氏名	監査役会		取締役会	
		出席状況	出席率	出席状況	出席率
常勤社外監査役	家 城 裕	全10回に出席	100.0%	全14回に出席	100.0%
非常勤社外監査役	田 櫓 孝 次	全3回に出席	100.0%	全4回に出席	100.0%
非常勤社外監査役	川 村 竜 也	全10回に出席	100.0%	全14回に出席	100.0%
非常勤社内監査役	小 室 英 夫	全10回に出席	100.0%	全14回に出席	100.0%

(注) 非常勤社外監査役田櫓 孝次氏につきましては、2023年3月30日退任以前の状況を記載しております。

なお、常勤社外監査役は、取締役会や経営会議等の重要な会議への出席、取締役・会計監査人・重要な使用者等からの報告聴取、社長以上の決裁段階の書類の閲覧、半期一巡で子会社を含めた各工場への工場往査を行っております。

- ・監査役会の主な議題と具体的な検討内容は下表のとおりです。

決議事項	報告事項
監査方針・重点項目・監査方法・分担	会計監査人の監査計画
会計監査人の選解任	会計監査人の四半期レビュー説明
会計監査人の報酬	有価証券報告書の監査関連の記載
監査役選任議案への同意	銀行取引の状況
常勤監査役、監査役会議長、特定監査人の選定	当社の業況
監査役監査基準の改定	監査役退任
監査役会の監査報告書 等	各監査役の監査報告書 等

内部監査の状況

a. 内部監査の組織、人員及び手続

内部監査部門として社長直轄にて監査室を設置しております。室長1名、スタッフ2名の計3名から構成されております。また、内部監査、財務報告に係る内部統制の有効性評価を分掌業務としております。

b. 内部監査、監査役監査及び会計監査の相互連携

内部監査、監査役監査、会計監査の相互連携はそれぞれ以下のとおりです。

[監査役監査と内部監査との連携]

連携内容	時期	概要
工場往査	4～6月 8～10月	全工場及び一部子会社への往査を監査役、監査室が同時に実施した。
J-SOX監査の監査役への報告	12月	財務報告に係る内部統制の評価状況が監査室から常勤監査役に報告された。
日常の職務遂行	随時	各種情報共有等を実施した。

[監査役監査と会計監査との連携]

連携内容	時期	概要
四半期レビュー	5、8、11月	会計監査人から監査役が各四半期レビューの説明を受け意見交換を行った。
年度決算監査報告	2月	会計監査人から監査役が年度決算の説明を受け意見交換を行った。
年度計画説明	5月	会計監査人から監査役が年度計画の説明を受け意見交換を行った。
工場往査立ち合い	4月	工場への監査役監査に会計監査人が立ち会った。
監査報酬説明	5、12月	会計監査人から監査役が年度監査計画の進捗を踏まえた監査報酬について説明を受け意見交換を行った。
KAMの検討状況共有	3月	会計監査人から監査役がKAMの検討状況の説明を受け意見交換を行った。
日本公認会計士協会による品質管理レビュー結果報告	12月	会計監査人から監査役が品質管理レビューの結果説明を受けた。

[内部監査と会計監査との連携]

連携内容	時期	概要
四半期レビュー	5月	会計監査人から監査室が各四半期レビューの説明を受け意見交換を行った。
年度決算監査報告	2月	会計監査人から監査室が年度決算の説明を受け意見交換を行った。
工場往査立ち合い	4月	工場への内部監査に監査法人が立ち会った。
IT監査報告	1、7、10月	会計監査人の当社IT監査の報告を監査室が受けた。
メール照会・ミーティング	随時	会計監査人と監査室が内部監査の計画の共有等を行った。

c. 内部監査の実効性を確保するための取組

内部監査計画は、每期、取締役会決議しております。内部監査部門が必要に応じて監査役会に報告する仕組みを有しております。工場往査の監査記録を取締役、関連する執行役員に回覧し状況を共有しております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

晴磐監査法人

b. 継続監査期間

2年間

c. 業務を執行した公認会計士

浅野 博、成田 弘の2名であります。

d. 監査業務に係る補助者の構成

会計監査業務に係る補助者は、公認会計士 8 名、その他 3 名であります。

e. 監査法人の選定方針と理由

当社の監査役会は、監査役会が定めた「会計監査人の評価基準」に基づき会計監査人を評価し選定することとしております。独立性、専門性、品質管理体制、監査報酬等を総合的に勘案し、晴磐監査法人を適任と判断しました。

f. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

監査役会は、日本監査役協会の「会計監査人の評価及び選定基準策定に関する監査役等の実務指針」を参考に「会計監査人の業務遂行状況チェックリスト」を作成し、監査実務に係る関連部署のヒアリング結果も勘案して、毎年、会計監査人を評価のうえ、再任不再任について決議しております。

g. 監査公認会計士等の異動について

当社の監査法人は次のとおり異動しております。

第80期 EY新日本有限責任監査法人

第81期 晴磐監査法人

なお、2022年 2 月28日付の臨時報告書において記載した事項は以下のとおりであります。

(1) 当該異動に係る監査公認会計士等の名称

選任する監査公認会計士等の名称

晴磐監査法人

退任する監査公認会計士等の名称

EY新日本有限責任監査法人

(2) 当該異動の年月日

2022年 3 月30日

(3) 退任する監査公認会計士等が監査公認会計士等となった年月日

1962年 8 月17日

(4) 退任する監査公認会計士等が直近 3 年間に作成した監査報告書等又は内部統制監査報告書における意見等に関する事項

該当事項はありません。

(5) 異動の決定又は異動に至った理由及び経緯

当社の会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人は、2022年 3 月30日開催予定の当社第80回定時株主総会終結の時をもって任期満了となります。

現任の会計監査人については、会計監査が適切かつ妥当に行われることを確保する体制を十分に備えているものの、監査継続期間が長期にわたること、当社の事業規模に適した監査対応と監査報酬水準の観点から、監査役会は会計監査人を見直すこととしました。

複数の監査法人と比較検討し、会計監査人としての独立性、専門性、品質管理体制、監査報酬等を総合的に勘案した結果、晴磐監査法人が適任であると判断しました。

(6) 上記(5)の理由及び経緯に対する意見

退任する監査公認会計士等の意見

特段の意見はない旨の回答を得ております。

監査役会の意見

妥当である旨の回答を得ております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬の内容

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)

提出会社	25		28	
連結子会社				
計	25		28	

(注)前連結会計年度は、上記以外に前々連結会計年度の監査に係る追加報酬 8 百万円を前任会計監査人であるEY新日本有限責任監査法人に対して支払っております。

b. 監査公認会計士等と同一のネットワークに属する者に対する報酬  
 該当事項はありません。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容  
 該当事項はありません。

d. 監査公認会計士等の非監査業務の内容  
 該当事項はありません。

e. 監査報酬の決定方針

特段の定めを明文化しておりませんが、監査法人から監査報酬見積額の提示及びその内容の説明を受け、既往推移、当社の規模、業務内容に基づいた監査日数、要員数等を総合的に勘案して、執行部門での決定に対して監査役会で同意することとしております。

f. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

会計監査人に対する報酬等に対して、当社の監査役会が会社法第399条第1項の同意をした理由は、会計監査人である晴盤監査法人から説明を受けた当事業年度に係る監査時間から見積もられた報酬額の算出根拠等について確認し、執行部門の意見も確認のうえ審議した結果、監査業務の内容及び報酬との対応関係がともに適切であると判断したことによります。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社の取締役及び監査役の基本報酬については、2017年3月30日に開催の第75回定時株主総会において、取締役の基本報酬の額は年額144百万円以内（うち、社外取締役年額24百万円以内）と決議されております（使用人兼務取締役の使用人分給与は含まない）。当該定時株主総会終結時点の取締役の員数は8名（うち、社外取締役は2名）であります。

監査役の基本報酬の額は年額30百万円以内と決議されております。当該定時株主総会終結時点の監査役の員数は4名であります。

また、2021年2月25日開催の取締役会において、「取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針」を決議しております。

なお、取締役会は、当事業年度に係る取締役の個人別の報酬等について、報酬等の内容の決定方法及び決定された報酬等の内容が当該決定方針と整合していることや諮問機関である人事委員会からの答申が尊重されていることを確認しており、当該決定方針に沿うものであると判断しております。

なお、取締役の個人別の報酬等の内容に係る決定方針の内容は、次のとおりであります。

a. 基本方針

当社の取締役の報酬は、企業価値の持続的な向上を図るインセンティブとして十分機能するよう株主利益と連動した報酬体系とし、個々の取締役の報酬の決定に際しては各職責を踏まえた適正な水準とすることを基本方針とする。

b. 基本報酬（金銭報酬）の個人別の報酬等の額の決定に関する方針（報酬を与える時期又は条件の決定に関する方針を含む。）

当社の取締役の基本報酬は、月例の固定報酬とし、役位、職責、在任年数に応じて当社の業績、従業員給与の水準、他社水準をも考慮しながら、総合的に勘案して決定するものとする。

c. 業績連動報酬等並びに非金銭報酬等の内容及び額又は数の算定方法の決定に関する方針（報酬等を与える時期又は条件の決定に関する方針を含む）

業績連動報酬等並びに非金銭報酬等は、企業価値の持続的な向上を図るインセンティブとして有効であり、将来においてその導入を阻むものではないが、当面は基本報酬（金銭報酬）のみの運用とする。

個人別の報酬額については、代表取締役社長が、諮問機関である人事委員会に原案を諮問し答申を受け、取締役会に上程して決議を得るものとし、決議の内容は、各取締役の基本報酬の額及び各取締役の担当事業の業績を踏まえた賞与の評価配分としております。

なお、人事委員会は、代表取締役社長、取締役副社長、総務部長及び人事部長で構成され、独立社外監査役同席のもとで適切な審議を行う任意の委員会であり、経営内容、経済情勢、個々の職責、業績貢献度を考慮して個別の額を決定し、その後、取締役会において決議しております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)				対象となる 役員の員数 (名)
		固定報酬	業績連動報酬	役員退職慰労 引当金繰入額	左記のうち、 非金銭報酬等	
取締役 (社外取締役を除く。)	26	26				3
監査役 (社外監査役を除く。)	2	2				1
社外役員	12	12				3

役員ごとの連結報酬等の総額等

連結報酬等の総額が1億円以上であるものが存在しないため、記載しておりません。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、株式の価値の変動または株式に係る配当によって利益を受けることを目的として保有する純投資目的の投資株式、当社の保有方針に沿った純投資目的以外の目的の投資株式（政策保有株式）に区分しております。なお、当社は純投資目的の投資株式を保有しておりません。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

当社の企業価値の持続性向上には、様々な企業との取引関係・協業関係の維持・強化が必要となります。当社は重要取引先・協業先として当社の中長期的な視点から有益かつ重要と判断する上場株式を、限定的かつ戦略的に保有することとしています

判断に際しては、保有目的の適切性及び資本コストをベースとした当社独自の指標を用いた収益性や相手先との事業関係等を総合的に勘案し、保有継続の可否及び保有株式数の見直しを行っております。

なお、少なくとも年1回取締役会に保有継続の可否及び保有株式の見直し結果を報告します。その中で保有継続意義のない株式については縮減を進めます。

b. 銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	2	16
非上場株式以外の株式		

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式			
非上場株式以外の株式			

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式		
非上場株式以外の株式	6	19

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由(注)	当社の株式の保有の有無
	株式数(株) 貸借対照表計上額 (百万円)	株式数(株) 貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)オークワ		6,521 5	安定的な営業関係取引の維持・強化のため保有しております。	無
イオン(株)		1,441 4	安定的な営業関係取引の維持・強化のため保有しております。	無
(株)江崎グリコ		745 2	安定的な営業関係取引の維持・強化のため保有しております。	無
(株)いなげや		925 1	安定的な営業関係取引の維持・強化のため保有しております。	無
(株)Olympicグループ		2,025 1	安定的な営業関係取引の維持・強化のため保有しております。	無
(株)マミーマート		70 0	安定的な営業関係取引の維持・強化のため保有しております。	無

(注) 定量的な保有効果については秘密保持の観点により記載しておりません。

みなし保有株式

当社は、みなし投資株式を保有しておりません。

保有目的が純投資目的である投資株式

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式を保有しておりません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したもの

当社は、当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものはありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したもの

当社は、当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものはありません。



## 第5 【経理の状況】

### 1 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号 以下「財務諸表等規則」という。)に基づいて作成しております。また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

### 2 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(2023年1月1日から2023年12月31日まで)及び事業年度(2023年1月1日から2023年12月31日まで)の連結財務諸表及び財務諸表について、晴磐監査法人の監査を受けております。

### 3 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握できる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、各種団体が主催するセミナーに参加しております。

## 1 【連結財務諸表等】

## (1) 【連結財務諸表】

## 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	2 2,170	2 3,059
受取手形及び売掛金	3,622	3,618
商品及び製品	80	62
仕掛品	31	36
原材料及び貯蔵品	384	414
未収入金	84	80
その他	89	106
貸倒引当金	15	-
流動資産合計	6,446	7,378
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	2 11,272	2 9,673
減価償却累計額	1 9,077	1 7,594
建物及び構築物（純額）	2,194	2,079
機械装置及び運搬具	2 20,378	2 18,877
減価償却累計額	1 17,742	1 16,360
機械装置及び運搬具（純額）	2,636	2,516
工具、器具及び備品	2 1,100	2 918
減価償却累計額	1 996	1 818
工具、器具及び備品（純額）	104	99
土地	2 5,366	2 5,369
リース資産	491	491
減価償却累計額	1 348	1 386
リース資産（純額）	143	105
建設仮勘定	19	45
有形固定資産合計	10,464	10,216
無形固定資産	52	52
投資その他の資産		
投資有価証券	30	16
その他	82	67
投資その他の資産合計	112	83
固定資産合計	10,629	10,351
資産合計	17,076	17,730

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形及び買掛金	1,747	1,782
短期借入金	2,3 3,400	2,3 3,800
1年内償還予定の社債	43	28
リース債務	46	27
未払消費税等	44	121
未払費用	1,284	1,163
未払法人税等	63	82
賞与引当金	48	52
事業構造改善引当金	517	193
その他	449	382
流動負債合計	7,646	7,635
固定負債		
社債	42	14
リース債務	44	18
繰延税金負債	576	575
退職給付に係る負債	2,175	2,246
長期割賦未払金	172	118
長期預り金	2 381	2 815
事業構造改善引当金	100	-
資産除去債務	94	95
固定負債合計	3,588	3,883
負債合計	11,234	11,518
純資産の部		
株主資本		
資本金	3,305	3,305
資本剰余金	3,658	3,658
利益剰余金	1,277	803
自己株式	9	9
株主資本合計	5,676	6,150
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	0	-
退職給付に係る調整累計額	165	60
その他の包括利益累計額合計	164	60
純資産合計	5,841	6,211
負債純資産合計	17,076	17,730

## 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年 1月 1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年 1月 1日 至 2023年12月31日)
売上高	1 24,552	1 26,442
売上原価	2 18,695	2 19,405
売上総利益	5,856	7,037
販売費及び一般管理費		
配送費	2,949	3,003
広告宣伝費	133	126
貸倒引当金繰入額	4	15
給料及び手当	1,722	1,742
賞与引当金繰入額	19	20
退職給付費用	72	58
減価償却費	51	42
その他	1,458	1,460
販売費及び一般管理費合計	2 6,403	2 6,439
営業利益又は営業損失( )	547	597
営業外収益		
受取利息	0	0
受取配当金	8	7
受取保険金	-	35
その他	41	50
営業外収益合計	50	94
営業外費用		
支払利息	27	31
固定資産処分損	9	9
アレンジメントフィー	-	10
その他	19	22
営業外費用合計	57	74
経常利益又は経常損失( )	554	617
特別利益		
投資有価証券売却益	703	1
特別利益合計	703	1
特別損失		
投資有価証券売却損	3	2
事業構造改善費用	3 1,158	3 90
減損損失	4 51	4 11
その他	5 41	-
特別損失合計	1,255	103
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失( )	1,105	515
法人税、住民税及び事業税	39	48
法人税等調整額	0	7
法人税等合計	39	41
当期純利益又は当期純損失( )	1,145	474
親会社株主に帰属する当期純利益又は親会社株主に帰属する当期純損失( )	1,145	474

## 【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
当期純利益又は当期純損失( )	1,145	474
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	519	0
退職給付に係る調整額	21	104
その他の包括利益合計	1,498	1,103
包括利益	1,644	370
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	1,644	370

## 【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益累計額			純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	3,305	3,658	132	9	6,822	518	144	663	7,485
当期変動額									
親会社株主に帰属する当期純損失( )			1,145		1,145				1,145
自己株式の取得				0	0				0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						519	21	498	498
当期変動額合計	-	-	1,145	0	1,145	519	21	498	1,644
当期末残高	3,305	3,658	1,277	9	5,676	0	165	164	5,841

当連結会計年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本					その他の包括利益累計額			純資産合計
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	3,305	3,658	1,277	9	5,676	0	165	164	5,841
当期変動額									
親会社株主に帰属する当期純利益			474		474				474
自己株式の取得				0	0				0
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)						0	104	103	103
当期変動額合計	-	-	474	0	474	0	104	103	370
当期末残高	3,305	3,658	803	9	6,150	-	60	60	6,211

## 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益又は税金等調整前当期純損失( )	1,105	515
減価償却費	575	517
事業構造改善引当金の増減額( は減少)	618	424
減損損失	2 377	2 11
退職給付に係る負債の増減額( は減少)	40	33
賞与引当金の増減額( は減少)	3	3
貸倒引当金の増減額( は減少)	4	15
受取利息及び受取配当金	8	7
支払利息	27	31
投資有価証券売却損益( は益)	700	0
売上債権の増減額( は増加)	161	4
棚卸資産の増減額( は増加)	18	17
仕入債務の増減額( は減少)	776	34
未払消費税等の増減額( は減少)	29	76
未払費用の増減額( は減少)	41	120
その他	116	30
小計	542	546
利息及び配当金の受取額	8	7
利息の支払額	27	31
法人税等の支払額又は還付額( は支払)	49	27
営業活動によるキャッシュ・フロー	473	494
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
有形固定資産の取得による支出	323	311
有形固定資産の除却による支出	6	5
無形固定資産の取得による支出	2	-
投資有価証券の取得による支出	9	4
投資有価証券の売却による収入	1,144	19
その他	13	2
投資活動によるキャッシュ・フロー	788	304
<b>財務活動によるキャッシュ・フロー</b>		
短期借入金の純増減額( は減少)	500	400
長期借入金の返済による支出	208	-
社債の償還による支出	88	43
ファイナンス・リース債務の返済による支出	71	45
自己株式の純増減額( は増加)	0	0
セール・アンド・割賦バックによる収入	143	-
預り保証金の受入れによる収入	231	454
その他	49	66
財務活動によるキャッシュ・フロー	543	698
現金及び現金同等物の増減額( は減少)	718	889
現金及び現金同等物の期首残高	1,316	2,034
現金及び現金同等物の期末残高	1 2,034	1 2,923



【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1 連結の範囲に関する事項

連結子会社は、スリースター製菓(株)、(株)ベーカリーブチ及び(株)ファースト・ロジスティックスの3社であります。

2 持分法の適用に関する事項

該当事項はありません。

3 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の事業年度の末日はすべて連結決算日と同一であります。

4 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

(イ) 有価証券

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの...連結決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等...移動平均法による原価法

(ロ) 棚卸資産

製品...売価還元法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

商品...月別総平均法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

原材料及び仕掛品...主として月別総平均法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

貯蔵品...最終仕入原価法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

(イ) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法によっております。

ただし、1998年4月1日以降取得した建物(建物附属設備を除く)、機械及び装置については、定額法によっております。

なお、2007年4月1日以降取得した建物(建物附属設備を除く)、機械及び装置以外の有形固定資産についても2007年度税制改正前の定率法によっております。

(ロ) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

(ハ) リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引については、自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

(3) 重要な引当金の計上基準

(イ) 貸倒引当金

債権の貸倒発生に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(ロ) 賞与引当金

従業員に対する賞与支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

(ハ) 事業構造改善引当金

事業構造改善に伴い発生する費用および損失に備えるため、その発生見込額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

(イ)退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

(ロ)数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数による定額法により、それぞれ発生翌連結会計年度から費用処理しております。

(ハ)小規模企業等における簡便法の採用

連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

当グループは食料品の製造、販売及び不動産賃貸を主たる事業としております。

食料品の販売取引については、顧客に商品及び製品が着荷した時点で顧客が支配を獲得し履行義務が充足されると判断しており、着荷時点において収益を認識しております。これらの収益は顧客との契約において約束された対価から、配送費及び販売手数料等の一部を控除した金額で測定しております。

顧客との契約における対価に配送費及び販売手数料等の一部が含まれている場合には、顧客に返金すると見込んでいる対価を返金負債として計上しており、返金負債は流動負債のその他に含めております。

取引の対価は履行義務を充足してから短期間で受領しており、重要な金融要素は含まれておりません。

不動産賃貸による収益については、「リース取引に関する会計基準」に従い、その発生期間に賃貸収益を認識しております。

(6) 重要な外貨建の資産又は負債の本邦通貨への換算の基準

外貨建金銭債権債務は、連結決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

(7) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金(現金及び現金同等物)は、手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3か月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(8) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

(イ)グループ通算制度の適用

当社及び連結子会社は、当連結会計年度よりグループ通算制度を適用しております。

(重要な会計上の見積り)

## 1 食品事業に係る固定資産の減損

## (1)当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
有形固定資産	10,464	10,216
無形固定資産	52	52
減損損失(注2)	51	11

(注1)「第5 経理の状況 1 連結財務諸表 注記事項(会計方針の変更)2 .不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法」に記載のとおり、当連結会計年度における会計方針の変更は遡及適用され、前連結会計年度については遡及適用後の数値を記載しております。

(注2)詳細は、(連結損益計算書関係) 4 減損損失に記載しております。

## (2)識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

## 算出方法

当グループは、事業用資産(食品事業)については工場を基本単位として、事業用資産(不動産事業)及び遊休資産については個別物件毎に、共用資産については、共用資産を含むより大きな単位で、資産のグルーピングを行っております。

減損の兆候が識別された資産グループの回収可能価額は、事業用資産及び遊休資産ともに正味売却価額を回収可能価額として算定しております。正味売却価額は原則として外部の不動産鑑定士による不動産鑑定評価額から処分費用見込額を控除して算出しております。

## 主要な仮定

不動産鑑定評価には主として原価法が適用され、主要な仮定は建物の再調達原価及び土地の更地価格であります。処分費用について、主要な仮定は購入業者や解体業者からの処分費用の見積り金額等に基づく将来の見込額であります。

## 翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

主要な仮定である建物の再調達原価及び土地の更地価格は、建築費の動向及び不動産市況等により左右され、処分費用見込額も既存設備に係る撤去工事の個別性が高いことから、正味売却価額の算定には不確実性が存在し、正味売却価額が変動することにより、固定資産の減損損失の算定に重要な影響を与える可能性があります。

## 2 事業構造改善引当金

## (1)当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
事業構造改善引当金(流動負債)	517	193
事業構造改善引当金(固定負債)	100	

## (2)識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

## 算出方法

事業構造改善引当金は、事業構造の改善に伴い発生することが見込まれる損失に備えるため、当連結会計年度末で合理的に見積ることが可能なものについて、翌連結会計年度以降に発生が見込まれる損失額を計上しております。

## 主要な仮定

横浜工場(神奈川県横浜市)の閉鎖に伴い発生する建物解体費用、土壌改良費用及び設備移設費用等について、主要な仮定は工事業者や解体業者からの工事費用の見積り金額等に基づく将来の見込額であります。

#### 翌連結会計年度の連結財務諸表に与える影響

発生が見込まれる事業構造改善費用について、必要かつ十分な金額を計上していると考えておりますが、当該見積りについて、予想しえない事象の発生や外部環境の変化等により見直しが必要となった場合、翌連結会計年度以降の連結財務諸表に重要な影響を与える可能性があります。

#### (会計方針の変更)

##### 1. 時価の算定に関する会計基準の適用指針の適用

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日。以下「時価算定会計基準適用指針」という。）を当連結会計年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することとしております。これによる、連結財務諸表に与える影響はありません。

##### 2. 不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法

当グループは、これまで食品事業の本業外の事業（営業外）として外部に賃貸していた不動産について、2022年12月末をもって横浜工場（神奈川県横浜市）を閉鎖した跡地を有効活用することを契機に、新たに不動産事業を専業として行う事業部を設置し、当連結会計年度より本業として運営することといたしました。

この変更に伴い、賃貸に係る損益について、従来、「賃貸収入」を営業外収益、賃貸固定資産に係る「賃貸費用」（減価償却費、租税公課等）は営業外費用とする方法によっておりましたが、当連結会計年度より「賃貸収入」を売上高、「賃貸費用」を売上原価に計上する方法に変更しております。

なお、連結貸借対照表上、従来、投資その他の資産に含めて計上しておりました「賃貸固定資産」は、当連結会計年度より有形固定資産の「建物及び構築物」、「工具器具及び備品」及び「土地」に含めて表示しております。

当該会計方針の変更は遡及適用され、前連結会計年度については遡及適用後の連結財務諸表となっております。

この結果、遡及適用前と比べ、前連結会計年度の売上高は161百万円、売上総利益は122百万円、営業利益は122百万円それぞれ増加しております。

また、前連結会計年度末の投資その他の資産の「賃貸固定資産」は3,129百万円減少、有形固定資産は「建物及び構築物」231百万円、「工具、器具及び備品」0百万円、「土地」2,898百万円、増加しております。

当該会計方針の変更は遡及適用されてはいますが、当連結会計年度の期首における純資産に対する累積的影響額はありません。

なお、1株当たり情報に与える影響はありません。

#### (未適用の会計基準等)

- ・「法人税、住民税及び事業税等に関する会計基準」（企業会計基準第27号 2022年10月28日 企業会計基準委員会）
- ・「包括利益の表示に関する会計基準」（企業会計基準第25号 2022年10月28日 企業会計基準委員会）
- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第28号 2022年10月28日 企業会計基準委員会）

##### (1) 概要

2018年2月に企業会計基準第28号「『税効果会計に係る会計基準』の一部改正」等（以下「企業会計基準第28号等」）が公表され、日本公認会計士協会における税効果会計に関する実務指針の企業会計基準委員会への移管が完了されましたが、その審議の過程で、次の2つの論点について、企業会計基準第28号等の公表後に改めて検討を行うこととされていたものが、審議され、公表されたものであります。

- ・税金費用の計上区分（その他の包括利益に対する課税）
- ・グループ法人税制が適用される場合の子会社株式等（子会社株式又は関連会社株式）の売却に係る税効果

(2) 適用予定日

2025年12月期の期首から適用します。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

「法人税、住民税及び事業税等に関する会計基準」等の適用による連結財務諸表に与える影響額については、現時点で評価中であります。

(連結貸借対照表関係)

1 減価償却累計額には減損損失累計額が含まれております。

2 担保提供資産及びその対応債務は次のとおりであります。

(1) 担保提供資産

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
現金及び預金	100(簿価)	100(簿価)
建物及び構築物	1,838( " )	1,726( " )
機械装置及び運搬具	717( " )	724( " )
工具、器具及び備品	36( " )	30( " )
土地	2,468( " )	2,471( " )
計	5,160	5,052

(2) 対応債務

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
短期借入金	3,100	3,500
長期預り金	266	701
計	3,366	4,201

前連結会計年度(2022年12月31日)

上記の他、未償還社債に関する被保証債務15百万円に対して建物及び構築物206百万円を担保に供しております。

また、上記の金額には工場財団抵当(1,836百万円)並びに当該対応債務(2,700百万円)が含まれております。

当連結会計年度(2023年12月31日)

上記の金額には工場財団抵当(1,793百万円)並びに当該対応債務(3,100百万円)が含まれております。

3 当座貸越契約及びコミットメントライン契約

当社は、運転資金及び設備資金の機動的かつ安定的な調達を行うため、取引銀行等と当座貸越契約及びコミットメントライン契約を締結しております。これらの契約に基づく連結会計年度末における当座貸越契約及びコミットメントライン契約に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
当座貸越極度額及びコミットメント ライン契約の総額	2,500	4,150
借入実行残高	1,300	1,700
差引額	1,200	2,450

(連結損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高については、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分表示して記載しておりません。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項（セグメント情報等）4 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報並びに収益の分解情報」に記載しております。

- 2 一般管理費及び当期製造費用に含まれる研究開発費は次のとおりであります。

（単位：百万円）

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
研究開発費	157	159

- 3 事業構造改善費用

前連結会計年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

横浜工場の閉鎖に伴い発生した損失であり、減損損失325百万円、移設費用181百万円、従業員退職に伴う費用131百万円、原状復帰工事507百万円、その他18百万円であります。

なお、減損損失の内容は以下のとおりであります。

場所	用途	種類	金額（百万円）
神奈川県横浜市	事業用資産 製造用設備	建物及び構築物	194
		機械装置及び運搬具	121
		工具、器具及び備品	9
計			325

当グループは、事業用資産については工場を基本単位として、賃貸不動産及び遊休資産については個別物件毎に、共用資産については、共用資産を含むより大きな単位で資産のグルーピングを行っております。

横浜工場にて所有する製造用設備については、工場閉鎖に伴い他の工場へ移設した一部の設備を除いて稼働させる可能性が極めて低いと判断したことから対象資産の帳簿価額を全額減額し、当該減少額（325百万円）を事業構造改善費用に含めております。

当連結会計年度（自 2023年1月1日 至 2023年12月31日）

横浜工場の閉鎖に伴い発生した損失であり、原状復帰工事等90百万円であります。

- 4 減損損失

前連結会計年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

場所	用途	種類	金額（百万円）
大阪府	事業用資産 製造用設備	建物及び構築物	0
		機械装置及び運搬具	49
		工具、器具及び備品	1
		リース資産	0
計			51

当グループは、事業用資産については工場を基本単位として、賃貸不動産及び遊休資産については個別物件毎に、共用資産については、共用資産を含むより大きな単位で資産のグルーピングを行っております。

当連結会計年度において、上記資産グループについて、回収可能価額を測定した結果、事業用資産のうち大阪空港工場について帳簿価額が正味売却価額を上回っていることから、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

なお、当該資産グループの回収可能価額は、正味売却価額により測定しており、正味売却価額は外部の不動産鑑定士による不動産鑑定評価額に基づいて算定しております。

当連結会計年度（自 2023年1月1日 至 2023年12月31日）

当連結会計年度において、当グループは以下の資産について減損損失を計上しました。

場所	用途	種類	金額（百万円）
----	----	----	---------

埼玉県	遊休資産 福利厚生施設	建物及び構築物	10
		工具、器具及び備品	0
計			11

当グループは、事業用資産（食品事業）については工場を基本単位として、事業用資産（不動産事業）及び遊休資産については個別物件毎に、共用資産については、共用資産を含むより大きな単位で、資産のグルーピングを行っております。

当連結会計年度において、上記資産について、回収可能価額を測定した結果、金町工場の福利厚生施設の老朽化に伴い施設の解体を行うことを決定したことから、帳簿価額を回収可能額（備忘価額）まで減額し、当該減少額を減損損失として計上しております。なお、金町工場を除く全工場の有形固定資産3,936百万円及び無形固定資産26百万円について、営業活動から生ずる損益が継続してマイナスであることから減損の兆候が認められますが、回収可能価額が帳簿価額を上回ったため、減損損失を計上しておりません。

#### 5 特別損失その他

前連結会計年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

当グループのスリースター製菓株式会社が製造している一部商品に金属異物が混入していることが判明し、販売先にて対象商品を自主回収しました。なお、これまでお客様からの健康被害の申し出はありません。販売先からの対象商品の回収費用、社告費用等について求償されたことにより、その製品回収関連費用として、特別損失のその他41百万円を計上しております。

当連結会計年度（自 2023年1月1日 至 2023年12月31日）

該当事項はありません

(連結包括利益計算書関係)

#### 1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	48	0
組替調整額	700	0
税効果調整前	749	1
税効果額	229	0
その他有価証券評価差額金	519	0
退職給付に係る調整額		
当期発生額	13	80
組替調整額	7	24
税効果調整前	21	104
退職給付に係る調整額	21	104
その他の包括利益合計	498	103

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	6,929,900			6,929,900

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	6,253	181		6,434

(注) 普通株式の自己株式数の増加181株は、単元未満株式の買取による増加であります。

当連結会計年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

1 発行済株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	6,929,900			6,929,900

2 自己株式に関する事項

株式の種類	当連結会計年度期首 株式数(株)	当連結会計年度増加 株式数(株)	当連結会計年度減少 株式数(株)	当連結会計年度末 株式数(株)
普通株式	6,434	35		6,469

(注) 普通株式の自己株式数の増加35株は、単元未満株式の買取による増加であります。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

(単位:百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
現金及び預金勘定	2,170	3,059
預入期間が3か月を超える 定期預金及び担保に供している定 期預金	136	136
現金及び現金同等物	2,034	2,923

2 減損損失

前連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

連結損益計算書の減損損失51百万円、事業構造改善費用に含まれる325百万円の合計額であります。

当連結会計年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

連結損益計算書の減損損失11百万円であります。



(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

(借主側)

所有権移転ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

・有形固定資産

食品事業における生産設備であります。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」によっております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引

リース資産の内容

・有形固定資産

オフィスコンピューターの機器(工具器具備品)他であります。

・無形固定資産

帳票用のソフトウェアであります。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」によっております。

2 オペレーティング・リース取引

(借主側)

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
1年以内	43	53
1年超	78	106
合計	122	160

(貸主側)

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
1年以内	81	67
1年超	67	
合計	149	67

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当グループは、資金運用については短期的な預金等に限定し、また、資金調達については銀行借入及び社債による方針です。なお、デリバティブ取引は内部管理規定に従い、実需の範囲で行うこととしております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である売掛金は、顧客の信用リスクに晒されています。当該リスクに関しては、取引先ごとの期日管理及び残高管理を行うとともに、定期的に主な取引先の信用状況を把握することとしております。

投資有価証券である株式は、市場価格の変動リスクに晒されていますが、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、定期的にその保有の妥当性を検証しております。

営業債務である買掛金は2か月以内の支払期日です。借入金は主に運転資金及び設備投資等に係る資金調達であります。変動金利の借入金は、金利の変動リスクに晒されていますが、定期的に経理所管の役員に報告されております。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。「現金及び預金」、「受取手形及び売掛金」、「支払手形及び買掛金」、「短期借入金」、「未払費用」については、短期間で決済されるものであるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、注記を省略しております。

前連結会計年度(2022年12月31日)

(単位:百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
投資有価証券	14	14	
資産計	14	14	

当連結会計年度(2023年12月31日)

該当事項はありません。

(注1) 市場価格のない株式等は、「投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下のとおりであります。

(単位:百万円)

区分	前連結会計年度	当連結会計年度
非上場株式	16	16

(注2) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度(2022年12月31日)

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	2,161
受取手形及び売掛金	3,622
合計	5,784

当連結会計年度（2023年12月31日）

	1年以内 (百万円)
現金及び預金	3,049
受取手形及び売掛金	3,618
合計	6,667

（注3）短期借入金の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（2022年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超2年以 内(百万 円)	2年超3年以 内(百万 円)	3年超4年以 内(百万 円)	4年超5年以 内(百万 円)	5年超(百万 円)
短期借入金	3,400					

当連結会計年度（2023年12月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超2年以 内(百万 円)	2年超3年以 内(百万 円)	3年超4年以 内(百万 円)	4年超5年以 内(百万 円)	5年超(百万 円)
短期借入金	3,800					

### 3 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

- （1）レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価
- （2）レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価
- （3）レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価  
時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

前連結会計年度（2022年12月31日）

区分	時価（百万円）			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券 その他有価証券 株式	14			14
資産計	14			14

（注）時価の算定に用いた評価技法およびインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

当連結会計年度（2023年12月31日）

該当事項はありません。

(有価証券関係)

## 1 その他有価証券

前連結会計年度(2022年12月31日)

区分	連結 貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの			
株式	5	4	0
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの			
株式	9	11	1
合計	14	16	1

当連結会計年度(2023年12月31日)

該当事項はありません。

## 2 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	1,144	703	3
合計	1,144	703	3

当連結会計年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	19	1	2
合計	19	1	2

## 3 減損処理を行った有価証券

該当事項はありません。

(デリバティブ取引関係)

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定拠出年金制度及び退職一時金制度を、連結子会社においては、退職一時金制度を設けております。  
なお、連結子会社は、退職給付債務の算定にあたり、簡便法を採用しております。

2 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
退職給付債務の期首残高	2,156	2,175
勤務費用	144	138
利息費用	12	12
数理計算上の差異の発生額	13	80
退職給付の支払額	123	160
退職給付債務の期末残高	2,175	2,246

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、勤務費用に計上しております。

(2) 退職給付債務の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債の調整表

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
非積立型制度の退職給付債務	2,175	2,246
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,175	2,246
退職給付に係る負債	2,175	2,246
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	2,175	2,246

(3) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
勤務費用	144	138
利息費用	12	12
数理計算上の差異の費用処理額	5	26
過去勤務費用の費用処理額	2	2
出向先負担金受入額	3	1
確定給付制度に係る退職給付費用	160	125

(注) 簡便法を採用している連結子会社の退職給付費用は、勤務費用に計上しております。

(4) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
過去勤務費用	2	2
数理計算上の差異	18	107
合計	21	104

(5) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額（税効果控除前）の内訳は次のとおりであります。

（単位：百万円）

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
未認識過去勤務費用	2	
未認識数理計算上の差異	168	60
合計	165	60

(6) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表しております。）

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
割引率	0.6%	0.6%
予想昇給率	1.6%	1.6%

3 確定拠出制度

確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度42百万円、当連結会計年度39百万円であります。

(税効果会計関係)

## 1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
<b>繰延税金資産</b>		
繰越欠損金(注)1	865	694
退職給付に係る負債	670	692
減損損失	69	63
賞与引当金	15	16
その他	117	162
繰延税金資産小計	1,738	1,630
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	865	693
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	855	913
評価性引当額小計	1,721	1,606
繰延税金資産合計	17	23
<b>繰延税金負債</b>		
固定資産圧縮積立金	575	575
その他	1	0
繰延税金負債合計	576	575
繰延税金負債の純額	558	551

(注) 1 税務上の繰越欠損金及び繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度(2022年12月31日)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(a)				10	181	673	865百万円
評価性引当額				10	181	673	865 "
繰延税金資産							"

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当連結会計年度(2023年12月31日)

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金(a)			10	181		502	694百万円
評価性引当額			10	181		500	693 "
繰延税金資産						1	1 "

(a) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2022年12月31日)	当連結会計年度 (2023年12月31日)
法定実効税率		30.6%
(調整)		
交際費等永久に損益に算入されない項目		0.7%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目		0.1%
住民税均等割		5.4%
評価性引当額の増減		29.1%
その他		0.5%
税効果会計適用後の法人税等の負担率		8.0%

(注) 前連結会計年度は税金等調整前当期純損失計上のため、注記を省略しております。

3 法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理

当社及び連結子会社は、当連結会計年度から、グループ通算制度を適用しております。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」(実務対応報告第42号 2021年8月12日)に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っております。

また、実務対応報告第42号第32項(1)に基づき、実務対応報告第42号の適用に伴う会計方針の変更による影響はないものとみなしております。

(資産除去債務関係)

重要性が乏しいため、記載を省略しております。

(賃貸等不動産関係)

当グループでは、千葉県その他の地域において、賃貸用の施設(土地及び建物を含む。)を所有しております。

2022年12月期における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は122百万円(賃貸収入は売上高に、賃貸費用は売上原価に計上)であります。

2023年12月期における当該賃貸等不動産に関する賃貸損益は102百万円(賃貸収入は売上高に、賃貸費用は売上原価に計上)であります。

また、当該賃貸等不動産の連結貸借対照表計上額、期中増減額及び時価は、次のとおりであります。

(単位:百万円)

		前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
連結貸借対照表計上額	期首残高	3,146	3,129
	期中増減額	16	227
	期末残高	3,129	3,357
期末時価		2,650	5,050

- (注) 1 連結貸借対照表計上額は、取得原価から減価償却累計額を控除した金額であります。
- 2 前連結会計年度の期中増減額のうち、増加額は空調設備(2百万円)、減少額は減価償却費(18百万円)であります。  
当連結会計年度の期中増減額のうち、増加額は自社使用から賃貸不動産への用途変更(239百万円)及び空調設備等(2百万円)、減少額は減価償却費(14百万円)であります。
- 3 期末時価は、社外の不動産鑑定士による不動産鑑定評価書等に基づく金額であります。  
なお、2022年12月末をもって横浜工場(神奈川県横浜市)を閉鎖した跡地を、賃貸不動産としたことから期末時価は2,400百万円増加しております。



(収益認識関係)

1 顧客との契約から生じる収益の分解情報

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記事項(セグメント情報等)」に記載のとおりであります。

2 収益を理解するための基礎となる情報

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「連結財務諸表の作成のための基本となる重要な事項 4 会計方針に関する事項 (5)重要な収益及び費用の計上基準」に記載のとおりであります。

3 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 契約残高

(単位:百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
顧客との契約から生じた債権(期首残高)	3,461	3,622
顧客との契約から生じた債権(期末残高)	3,622	3,618

当社及び連結子会社については、契約資産は該当がなく、契約負債に重要なものはありません。

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社及び連結子会社では、未充足の履行義務に配分した取引価格はありません。

また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1 報告セグメントの概要

当グループの報告セグメントは、当グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。当グループは、当社及び連結子会社単位を基礎とした事業セグメントに分類しており、「食品事業」及び「不動産事業」の2つを報告セグメントとしております。

「食品事業」はパン類を中心とする食品の製造販売を主としており、「不動産事業」は不動産賃貸を主とした事業活動を行っております。

2 報告セグメントの変更等に関する事項

当グループは、従来、「食品事業」の単一セグメントとしておりましたが、当連結会計年度より報告セグメントを「食品事業」及び「不動産事業」に変更しております。これは、横浜工場(神奈川県横浜市)を閉鎖した跡地を有効活用することを契機に、不動産事業として運営するものであります。この変更に伴い、会計方針の変更に記載のとおり、当連結会計年度より、不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法に係る会計方針の変更を行っております。

3 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、連結財務諸表を作成するために採用される会計方針に準拠した方法であります。報告セグメントの利益又は損失は、営業利益又は営業損失ベースの数値であります。

4 報告セグメントごとの売上高及び利益又は損失の金額に関する情報並びに収益の分解情報  
前連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			調整額 (注1)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	食品事業	不動産事業	計		
売上高					
パン部門	18,091		18,091		18,091
和洋菓子部門	4,144		4,144		4,144
その他	2,154		2,154		2,154
顧客との契約から生じる収益	24,390		24,390		24,390
その他の収益(注3)		161	161		161
外部顧客への売上高	24,390	161	24,552		24,552
セグメント間の内部売上高又は振替高					
計	24,390	161	24,552		24,552
セグメント利益	588	122	711	1,258	547
その他の項目					
減価償却費(注4)	556	18	575		575

(注) 1 セグメント利益の調整額 1,258百万円には、各報告セグメントに配分していない全社費用が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない当社の総務、経理部門等に係る一般管理費であります。

2 セグメント利益又は損失は、連結損益計算書の営業損失と調整を行っております。

3 その他の収益は、「リース取引に関する会計基準」の範囲に含まれる不動産賃貸収入であります。

4 セグメント資産については、経営資源の配分決定及び業績評価の検討対象となっていないため、記載しておりません。ただし、配分されていない償却資産の減価償却費は、合理的な配賦基準で各事業セグメントへ配賦しております。

当連結会計年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

(単位：百万円)

	報告セグメント			調整額 (注1)	連結財務諸表 計上額 (注2)
	食品事業	不動産事業	計		
売上高					
パン部門	19,551		19,551		19,551
和洋菓子部門	4,416		4,416		4,416
その他	2,312		2,312		2,312
顧客との契約から生じる収益	26,280		26,280		26,280
その他の収益(注3)		161	161		161
外部顧客への売上高	26,280	161	26,442		26,442
セグメント間の内部売上高又は振替高					
計	26,280	161	26,442		26,442
セグメント利益	1,691	98	1,790	1,192	597
その他の項目					
減価償却費(注4)	503	14	517		517

(注) 1 セグメント利益の調整額 1,192百万円には、各報告セグメントに配分していない全社費用が含まれております。全社費用は、主に報告セグメントに帰属しない当社の総務、経理部門等に係る一般管理費であります。

2 セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

3 その他の収益は、「リース取引に関する会計基準」の範囲に含まれる不動産賃貸収入であります。

4 セグメント資産については、経営資源の配分決定及び業績評価の検討対象となっていないため、記載しておりません。ただし、配分されていない償却資産の減価償却費は、合理的な配賦基準で各事業セグメントへ配賦しております。

【関連情報】

前連結会計年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

当連結会計年度（自 2023年1月1日 至 2023年12月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

セグメント情報に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦以外の外部顧客への売上高がないため、該当事項はありません。

(2) 有形固定資産

本邦以外に所在している有形固定資産がないため、該当事項はありません。

3. 主要な顧客ごとの情報

外部顧客への売上高のうち、連結損益計算書の売上高の10%以上を占める相手先がないため、記載はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 2022年1月1日 至 2022年12月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			全社・消去	合計
	食品事業	不動産事業	計		
減損損失	51		51		51

当連結会計年度（自 2023年1月1日 至 2023年12月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			全社・消去	合計
	食品事業	不動産事業	計		
減損損失	11		11		11

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

(1) 連結財務諸表提出会社と関連当事者の取引

(ア) 連結財務諸表提出会社の親会社及び主要株主(会社等に限る。)等

前連結会計年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有)割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
その他の 関係会社	豊田通商(株)	愛知県 名古屋市 中村区	64,936	各種物品の 国内取引等	(被所有) 直接 33.48	業務提携 原材料の購入 役員の兼任	原材料の 購入	6,211	買掛金 未払費用	1,301 10

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

原材料の購入については、市場の実勢価格を勘案して合理的に決定しております。

当連結会計年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有)割合 (%)	関連当事者との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
その他の 関係会社	豊田通商(株)	愛知県 名古屋市 中村区	64,936	各種物品の 国内取引等	(被所有) 直接 33.48	業務提携 原材料の購入 役員の兼任	原材料の 購入	7,202	買掛金 未払費用	1,359 11

(注) 取引条件及び取引条件の決定方針等

原材料の購入については、市場の実勢価格を勘案して合理的に決定しております。

(2) 連結財務諸表提出会社の連結子会社と関連当事者との取引

該当事項はありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
1株当たり純資産額	843.72円	897.21円
1株当たり当期純利益又は 1株当たり当期純損失( )	165.50円	68.51円

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については潜在株式がないため記載しておりません。

2 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度末 (2022年12月31日)	当連結会計年度末 (2023年12月31日)
純資産の部の合計額 (百万円)	5,841	6,211
純資産の部の合計額から 控除する金額 (百万円)		
普通株式に係る期末の純資産額 (百万円)	5,841	6,211
1株当たり純資産額の算定に 用いられた普通株式の数 (株)	6,923,466	6,923,431

3 1株当たり当期純利益金額又は1株当たり当期純損失金額の算定上の基礎は、以下のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当連結会計年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益 又は親会社株主に帰属する当期純 損失( ) (百万円)	1,145	474
普通株主に帰属しない金額 (百万円)		
普通株式に係る親会社株主に帰属 する当期純利益又は普通株式に係 る親会社株主に帰属する当期純損 失( ) (百万円)	1,145	474
普通株式の期中平均株式数 (株)	6,923,523	6,923,447

(重要な後発事象)

(コミットメントライン契約の締結)

当社は、個別相対方式によるコミットメントラインを、2024年2月7日付けで契約いたしました。

1. コミットメントライン設定の目的

機動的かつ安定的な資金調達手段を確保することを通じて財務体質の強化及び安定化を図るものであります。

2. コミットメントライン契約の概要

- (1) 契約締結先 株式会社みずほ銀行
- (2) 借入極度額 15億円
- (3) 契約締結日 2024年2月7日
- (4) 契約期間 2024年2月7日～2024年9月30日(半年)延長オプション付き
- (5) 契約形態 個別相対方式コミットメントライン
- (6) 使用用途 運転資金
- (7) 借入金利 変動金利
- (8) 担保の有無 担保有・無保証
- (9) 純資産維持、利益維持及び売上維持に関する財務制限条項が付されております。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

会社名	銘柄	発行年月日	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	利率 (%)	担保	償還期限
スリースター製菓 (株)	第1回無担保変動利付社債	2018年 3月30日	15	( )	0.126	あり	2023年 3月31日
スリースター製菓 (株)	第2回無担保社債	2018年 6月29日	71	42 (28)	0.07	なし	2025年 6月30日
合計			86	42 (28)			

(注) 1 「当期末残高」欄の( )内書は、1年以内償還予定額の金額であります。

2 連結決算日後5年以内における1年ごとの償還予定額は次のとおりであります。

1年以内 (百万円)	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
28	14			

【借入金等明細表】

区分	当期末残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	3,400	3,800	0.78	
1年以内に返済予定のリース債務	46	27		
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	44	18		2025年～2026年
合計	3,491	3,845		

(注) 1 「平均利率」については、借入金等の期末残高に対する加重平均利率を記載しております。

なお、リース債務については、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、「平均利率」を記載しておりません。

2 リース債務(1年以内に返済予定のものを除く)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下のとおりであります

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
リース債務	18	0		

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	6,265	12,804	19,480	26,442
税金等調整前四半期(当期)純利益金額又は税金等調整前四半期純損失金額 ( ) (百万円)	71	13	285	515
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額又は親会社株主に帰属する四半期純損失金額 ( ) (百万円)	81	13	251	474
1株当たり四半期(当期)純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額 ( ) (円)	11.82	1.91	36.31	68.51

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額 ( ) (円)	11.82	9.91	38.22	32.20



## 2 【財務諸表等】

## (1) 【財務諸表】

## 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	1 1,953	1 2,779
売掛金	4 3,464	4 3,489
商品及び製品	82	65
仕掛品	5	6
原材料及び貯蔵品	331	355
前渡金	37	53
前払費用	45	44
未収入金	4 108	4 117
その他	0	0
流動資産合計	6,027	6,911
固定資産		
有形固定資産		
建物	1 1,811	1 1,702
構築物	1 101	1 97
機械及び装置	1 2,312	1 2,188
車両運搬具	1 9	1 10
工具、器具及び備品	1 90	1 80
土地	1 5,366	1 5,369
リース資産	116	100
建設仮勘定	3	44
有形固定資産合計	9,811	9,594
無形固定資産		
借地権	16	16
ソフトウェア	19	13
電話加入権	14	12
その他	2	10
無形固定資産合計	51	51
投資その他の資産		
投資有価証券	30	16
関係会社株式	288	288
長期前払費用	15	13
その他	49	29
投資その他の資産合計	383	347
固定資産合計	10,247	9,994
資産合計	16,275	16,906

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
<b>負債の部</b>		
<b>流動負債</b>		
買掛金	4 1,798	4 1,819
短期借入金	1,2 3,100	1,2 3,500
リース債務	23	22
未払金	164	103
未払消費税等	17	101
未払費用	4 1,241	4 1,131
未払法人税等	59	65
預り金	148	153
賞与引当金	36	40
事業構造改善引当金	507	193
その他	120	107
流動負債合計	7,216	7,239
<b>固定負債</b>		
リース債務	39	17
繰延税金負債	576	575
退職給付引当金	2,204	2,162
長期割賦未払金	172	118
長期預り金	1 381	1 815
事業構造改善引当金	100	-
資産除去債務	94	95
固定負債合計	3,568	3,784
負債合計	10,784	11,023
<b>純資産の部</b>		
<b>株主資本</b>		
資本金	3,305	3,305
資本剰余金		
資本準備金	3,659	3,659
資本剰余金合計	3,659	3,659
利益剰余金		
利益準備金	600	600
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	1,303	1,303
繰越利益剰余金	3,367	2,975
利益剰余金合計	1,463	1,071
自己株式	9	9
株主資本合計	5,491	5,883
<b>評価・換算差額等</b>		
その他有価証券評価差額金	0	-
評価・換算差額等合計	0	-
純資産合計	5,490	5,883
負債純資産合計	16,275	16,906

## 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当事業年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
売上高	22,554	24,564
売上原価	1 17,200	1 17,985
売上総利益	5,354	6,579
販売費及び一般管理費	2 6,136	2 6,239
営業利益又は営業損失( )	782	339
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	1 107	1 32
賃貸収入	1 77	1 74
雑収入	1 110	1 116
営業外収益合計	296	223
営業外費用		
支払利息	25	29
賃貸費用	9	8
固定資産処分損	9	9
アレンジメントフィー	-	10
雑損失	13	13
営業外費用合計	58	71
経常利益又は経常損失( )	544	490
特別利益		
投資有価証券売却益	703	1
特別利益合計	703	1
特別損失		
減損損失	4 51	4 11
事業構造改善費用	3 1,136	3 90
投資有価証券売却損	3	2
特別損失合計	1,191	103
税引前当期純利益又は税引前当期純損失( )	1,032	388
法人税、住民税及び事業税	15	1
法人税等調整額	0	1
法人税等合計	14	2
当期純利益又は当期純損失( )	1,047	391

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本								評価・換算差額等		純資産合計	
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			自己株式	株主資本合計	その他 有価証券 評価差額 金	評価・換 算 差額等 合計		
		資本準備 金	資本剰余 金 合計	利益準備 金	固定資産 圧縮積立 金	その他利益剰余金 繰越利益 剰余金						利益剰余 金 合計
当期首残高	3,305	3,659	3,659	600	1,303	2,319	415	9	6,539	518	518	7,057
当期変動額												
当期純損失( )						1,047	1,047		1,047			1,047
自己株式の取得								0	0			0
株主資本以外の項目 の当期変動額(純 額)										519	519	519
当期変動額合計	-	-	-	-	-	1,047	1,047	0	1,047	519	519	1,567
当期末残高	3,305	3,659	3,659	600	1,303	3,367	1,463	9	5,491	0	0	5,490

当事業年度(自 2023年 1月 1日 至 2023年12月31日)

(単位：百万円)

	株主資本									評価・換算差額等		純資産合計
	資本金	資本剰余金		利益剰余金			自己株式	株主資本合計	其他 有価証券 評価差額 金	評価・換 算 差額等 合計		
		資本準備 金	資本剰余 金 合計	利益準備 金	固定資産 圧縮積立 金	その他利益剰余金 繰越利益 剰余金					利益剰余 金 合計	
当期首残高	3,305	3,659	3,659	600	1,303	3,367	1,463	9	5,491	0	0	5,490
当期変動額												
当期純利益						391	391		391			391
自己株式の取得								0	0			0
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）										0	0	0
当期変動額合計	-	-	-	-	-	391	391	0	391	0	0	392
当期末残高	3,305	3,659	3,659	600	1,303	2,975	1,071	9	5,883	-	-	5,883

## 【注記事項】

### (重要な会計方針)

#### 1 有価証券の評価基準及び評価方法

子会社株式.....移動平均法による原価法

その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの.....決算日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

市場価格のない株式等...移動平均法による原価法

#### 2 棚卸資産の評価基準及び評価方法

製品...売価還元法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

商品...月別総平均法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

原材料及び仕掛品...主として月別総平均法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

貯蔵品...最終仕入原価法による原価法(収益性の低下に基づく簿価切下げの方法)

#### 3 固定資産の減価償却の方法

##### (1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法によっております。

ただし、1998年4月1日以降取得の建物(建物附属設備を除く)、機械及び装置については、定額法によっております。

なお、2007年4月1日以降取得した建物(建物附属設備を除く)、機械及び装置以外の有形固定資産についても2007年度税制改正前の定率法によっております。

##### (2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

ただし、自社利用のソフトウェアについては、社内における利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

##### (3) リース資産

所有権移転ファイナンス・リース取引については、自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法を採用しております。

所有権移転外ファイナンス・リース取引については、リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法を採用しております。

#### 4 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、決算日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しております。

#### 5 引当金の計上基準

##### (1) 貸倒引当金

債権の貸倒発生に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

##### (2) 賞与引当金

従業員に対する賞与支給に充てるため、支給見込額を計上しております。

##### (3) 事業構造改善引当金

事業構造改善に伴い発生する費用および損失に備えるため、その発生見込額を計上しております。

##### (4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務の見込額に基づき計上しております。

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数による定額法により、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

6 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

7 収益及び費用の計上基準

主要な事業における主な履行義務の内容及び収益を認識する通常の時点については、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項 4 会計方針に関する事項 (5)重要な収益及び費用の計上基準」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

8 その他の財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1)グループ通算制度の適用

当社は、当事業年度よりグループ通算制度を適用しております。

(重要な会計上の見積り)

1 食品事業に係る固定資産の減損

(1)当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位:百万円)

	前事業年度	当事業年度
有形固定資産	9,811	9,594
無形固定資産	51	51
減損損失(注2)	51	11

(注1)「第5 経理の状況 1 財務諸表 注記事項(会計方針の変更)(2)不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法」に記載のとおり、当事業年度における会計方針の変更は遡及適用され、前事業年度については遡及適用後の数値を記載しております。

(注2)詳細は、(損益計算書関係) 4 減損損失に記載しております。

(2)識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項(重要な会計上の見積り) 1 食品事業に係る固定資産の減損」に記載した内容と同一であります。

2 事業構造改善引当金

(1)当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位:百万円)

	前事業年度	当事業年度
事業構造改善引当金(流動負債)	507	193
事業構造改善引当金(固定負債)	100	

(2)識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項(重要な会計上の見積り) 2 事業構造改善引当金」に記載した内容と同一であります。

(会計方針の変更)

(1) 時価の算定に関する会計基準の適用指針の適用

「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 2021年6月17日。以下「時価算定会計基準適用指針」という。)を当事業年度の期首から適用し、時価算定会計基準適用指針第27-2項に定める経過的な取扱いに従って、時価算定会計基準適用指針が定める新たな会計方針を将来にわたって適用することとしております。これによる、財務諸表に与える影響はありません。

(2) 不動産事業に係る収益及び費用等の処理方法

当社は、これまで食品事業の本業外の事業(営業外)として当グループの外部に賃貸していた不動産について、2022年12月末をもって横浜工場(神奈川県横浜市)を閉鎖した跡地を有効活用することを契機に、新たに不動産事業を専業として行う事業部を設置し、当事業年度より本業として運営することといたしました。

この変更に伴い、賃貸に係る損益について、従来、「賃貸収入」を営業外収益、賃貸固定資産に係る「賃貸費用」(減価償却費、租税公課等)は営業外費用とする方法によっておりましたが、当事業年度より「賃貸収入」を売上高、「賃貸費用」を売上原価に計上する方法に変更しております。

なお、貸借対照表上、従来、投資その他の資産に含めて計上しておりました「賃貸固定資産」は、当事業年度より有形固定資産の「建物及び構築物」、「工具器具及び備品」及び「土地」に含めて表示しております。

当該会計方針の変更は遡及適用され、前事業年度については遡及適用後の財務諸表となっております。この結果、遡及適用前と比べ、前事業年度の売上高は161百万円、売上総利益は122百万円、営業利益は122百万円それぞれ増加しております。

また、前事業年度末の投資その他の資産の「賃貸固定資産」は3,129百万円減少、有形固定資産は「建物」220百万円、「構築物」11百万円、「工具、器具及び備品」0百万円、「土地」2,898百万円、増加しております。

当該会計方針の変更は遡及適用されてはいますが、当事業年度の期首における純資産に対する累積的影響額はありません。

なお、1株当たり情報に与える影響はありません。



(貸借対照表関係)

## 1 担保提供資産及びその対応債務は次のとおりであります。

## (1) 担保提供資産

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
現金及び預金	100(簿価)	100(簿価)
建物	1,806( " )	1,693( " )
構築物	32( " )	32( " )
機械及び装置	715( " )	720( " )
車両運搬具	2( " )	4( " )
工具、器具及び備品	36( " )	30( " )
土地	2,468( " )	2,471( " )
計	5,160	5,052

## (2) 対応債務

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
短期借入金	3,100	3,500
長期預り金	266	701
計	3,366	4,201

前事業年度(2022年12月31日)

上記担保資産のうち、土地(50百万円)及び建物(166百万円)をスリースター製菓株式会社発行の未償還社債に関する被保証債務15百万円の物上保証に供しております。

また、上記の金額には工場財団抵当(1,836百万円)及び当該対応債務(2,700百万円)が含まれております。

当事業年度(2023年12月31日)

上記の金額には工場財団抵当(1,793百万円)及び当該対応債務(3,100百万円)が含まれております。

## 2 当座貸越契約及びコミットメントライン契約

当社は、運転資金及び設備資金の機動的かつ安定的な調達を行うため、取引銀行等と当座貸越契約及びコミットメントライン契約を締結しております。これらの契約に基づく当事業年度末における当座貸越契約及びコミットメントライン契約に係る借入未実行残高は次のとおりであります。

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
当座貸越極度額及びコミットメント ライン契約の総額	1,800	3,550
借入実行残高	1,000	1,400
差引額	800	2,150

3 偶発債務

(1) 他社のリース取引に係る未経過リース料期末残高に対する連帯保証

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
(株)ファースト・ロジスティックス	156	(株)ファースト・ロジスティックス

4 関係会社に対するものが次のとおり含まれております。

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
短期金銭債権	35	10
短期金銭債務	1,674	1,706

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引に係る主なもの

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当事業年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
仕入高	7,449	8,472
その他の営業取引高	2,404	2,426
営業取引以外の取引高	252	171

2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)	当事業年度 (自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)
配送費	3,494	3,632
給料及び諸手当	1,171	1,138
賞与引当金繰入額	12	13
退職給付費用	63	50
減価償却費	44	34

おおよその割合

販売費	83.0%	83.3%
一般管理費	17.0%	16.7%

3 事業構造改善費用

前事業年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

横浜工場の閉鎖に伴い発生した損失であり、減損損失325百万円、移設費用181百万円、従業員退職に伴う費用109百万円、原状復帰工事507百万円、その他13百万円であります。

なお、減損損失の内容は以下のとおりであります。

場所	用途	種類	金額(百万円)
神奈川県横浜市	事業用資産 製造用設備	建物及び構築物	194
		機械装置及び運搬具	121
		工具、器具及び備品	9
計			325

当グループは、事業用資産については工場を基本単位として、賃貸不動産及び遊休資産については個別物件毎に、共用資産については、共用資産を含むより大きな単位で資産のグルーピングを行っております。

横浜工場にて所有する製造用設備については、工場閉鎖に伴い他の工場へ移設した一部の設備を除いて稼働させる可能性が極めて低いと判断したことから対象資産の帳簿価額を全額減額し、当該減少額(325百万円)を事業構造改善費用に含めております。

当事業年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

横浜工場の閉鎖に伴い発生した損失であり、原状復帰工事等90百万円であります。

## 4 減損損失

前事業年度(自 2022年1月1日 至 2022年12月31日)

場所	用途	種類	金額(百万円)
大阪府	事業用資産 製造用設備	建物及び構築物	0
		機械装置及び運搬具	49
		工具、器具及び備品	1
		リース資産	0
計			51

当社は、事業用資産については工場を基本単位として、賃貸不動産及び遊休資産については個別物件毎に、共用資産については、共用資産を含むより大きな単位で資産のグルーピングを行っております。

当事業年度において、上記資産グループについて、回収可能価額を測定した結果、事業用資産のうち大阪空港工場について帳簿価額が正味売却価額を上回っていることから、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

なお、当該資産グループの回収可能価額は、正味売却価額により測定しており、正味売却価額は外部の不動産鑑定士による不動産鑑定評価額に基づいて算定しております。

当事業年度(自 2023年1月1日 至 2023年12月31日)

場所	用途	種類	金額(百万円)
埼玉県	遊休資産 福利厚生施設	建物及び構築物	10
		工具、器具及び備品	0
計			11

当社は、事業用資産(食品事業)については工場を基本単位として、事業用資産(不動産事業)及び遊休資産については個別物件毎に、共用資産については、共用資産を含むより大きな単位で、資産のグルーピングを行っております。

当事業年度において、上記資産について、回収可能価額を測定した結果、金町工場の福利厚生施設の老朽化に伴い施設の解体を行うことを決定したことから、帳簿価額を回収可能額(備忘価額)まで減額し、当該減少額を減損損失として計上しております。なお、金町工場を除く全工場の有形固定資産3,936百万円及び無形固定資産26百万円について、営業活動から生ずる損益が継続してマイナスであることから減損の兆候が認められますが、回収可能価額が帳簿価額を上回ったため、減損損失を計上しておりません。

## (有価証券関係)

前事業年度(2022年12月31日)

子会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

区分	前事業年度 (百万円)
子会社株式	288
計	288

当事業年度(2023年12月31日)

子会社株式は、市場価格のない株式等のため、子会社株式の時価を記載しておりません。

なお、市場価格のない株式等の子会社株式の貸借対照表計上額は次のとおりです。

区分	当事業年度 (百万円)
子会社株式	288
計	288

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
<b>繰延税金資産</b>		
繰越欠損金	844	668
退職給付引当金	674	662
減損損失	69	63
関係会社株式評価損	32	32
賞与引当金	11	12
その他	95	146
繰延税金資産小計	1,727	1,585
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額	844	668
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	883	917
評価性引当額小計	1,727	1,585
繰延税金資産合計		
<b>繰延税金負債</b>		
固定資産圧縮積立金	575	575
その他	1	0
繰延税金負債合計	576	575
繰延税金負債の純額	576	575

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2022年12月31日)	当事業年度 (2023年12月31日)
法定実効税率		30.6%
(調整)		
交際費等永久に損益に算入されない項目		0.4%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目		2.1%
住民税均等割		6.7%
評価性引当額の増減		36.6%
その他		0.2%
税効果会計適用後の法人税等の負担率		0.7%

(注) 前事業年度は税金前当期純損失計上のため、注記を省略しております。

3 法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理

当社は、当事業年度から、グループ通算制度を適用しております。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」(実務対応報告第42号 2021年8月12日)に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っております。

また、実務対応報告第42号第32項(1)に基づき、実務対応報告第42号の適用に伴う会計方針の変更による影響はないものとみなしております。

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表 注記事項(収益認識関係)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

(コミットメントライン契約の締結)

当社は、個別相対方式によるコミットメントラインを、2024年2月7日付けで契約いたしました。

1. コミットメントライン設定の目的

機動的かつ安定的な資金調達手段を確保することを通じて財務体質の強化及び安定化を図るものであります。

2. コミットメントライン契約の概要

- (1) 契約締結先 株式会社みずほ銀行
- (2) 借入極度額 15億円
- (3) 契約締結日 2024年2月7日
- (4) 契約期間 2024年2月7日～2024年9月30日(半年)延長オプション付き
- (5) 契約形態 個別相対方式コミットメントライン
- (6) 使用用途 運転資金
- (7) 借入金利 変動金利
- (8) 担保の有無 担保有・無保証
- (9) 純資産維持、利益維持及び売上維持に関する財務制限条項が付されております。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	9,320	13	1,284 (10)	108	8,049	6,347
	構築物	1,284	3	155 (0)	7	1,132	1,035
	機械及び装置	18,693	129	1,481	244	17,340	15,151
	車両運搬具	177	2	23	1	156	145
	工具、器具及び備品	974	14	181 (0)	23	806	725
	土地	5,366	3			5,369	
	リース資産	245			16	245	145
	建設仮勘定	3	225	184		44	
	計	36,065	392	3,311 (11)	402	33,145	23,551
無形固定資産	借地権	16				16	
	ソフトウェア	218	1		7	219	206
	電話加入権	14		1		12	
	その他	2	12	4	0	10	0
		計	250	13	6	7	258

(注) 1 当事業年度より不動産事業を本業として運営することにより従来、投資その他の資産に計上していた賃貸固定資産の期首残高は、有形固定資産の建物、構築物、工具、器具及び備品、土地及び無形固定資産のその他の期首残高に加算し、会計方針の変更による遡及適用反映後の金額となっております。

2 「当期減少額」欄の( )は内数で、当期の減損損失計上額であります。

3 有形固定資産当期増加額のうち主なものは、金町工場の機械装置(パン生産設備)64百万円、高崎工場の機械装置(パン生産設備)31百万円及び空港工場の機械装置(パン生産設備)22百万円であります。

4 有形固定資産当期減少額のうち主なものは、横浜工場の建物(生産工場)1,270百万円、機械装置(パン生産設備)1,347百万円、空港工場の機械装置(パン生産設備)52百万円及び金町工場の機械装置(パン生産設備)34百万円であります。

5 「当期首残高」及び「当期末残高」は、取得価額により記載しております。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
賞与引当金	36	40	36	40
退職給付引当金	2,204	106	148	2,162
事業構造改善引当金	608	90	505	193

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	1月1日から12月31日まで
定時株主総会	3月中
基準日	12月31日
剰余金の配当の基準日	6月30日及び12月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り 取扱場所 株主名簿管理人 取次所 買取手数料	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社 証券代行部 (特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番1号 三井住友信託銀行株式会社
公告掲載方法	当会社の公告方法は、電子公告とする。但し、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合の公告方法は、日本経済新聞に掲載する方法とする。(URL <a href="https://www.daiichipan.co.jp/">https://www.daiichipan.co.jp/</a> )
株主に対する特典	該当事項なし

(注) 当社は、「当会社の単元未満株式を有する株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない。(1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利 (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利 (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当を受ける権利及び募集新株予約権の割当を受ける権利」旨を定款に定めております。



## 第7 【提出会社の参考情報】

### 1 【提出会社の親会社等の情報】

当社は、親会社等はありません。

### 2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書 及びその添付書類 並びに確認書	事業年度 (第81期)	自 2022年1月1日 至 2022年12月31日	2023年3月30日 関東財務局長に提出。
-----------------------------------	----------------	------------------------------	--------------------------

(2) 内部統制報告書 及びその添付書類	事業年度 (第81期)	自 2022年1月1日 至 2022年12月31日	2023年3月30日 関東財務局長に提出。
-------------------------	----------------	------------------------------	--------------------------

### (3) 臨時報告書

(株主総会における議決権行使の結果)

企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2の規定に基づく臨時報告書を2023年3月31日  
関東財務局長に提出。

(4) 四半期報告書 及び確認書	第82期 第1四半期	自 2023年1月1日 至 2023年3月31日	2023年5月15日 関東財務局長に提出。
	第82期 第2四半期	自 2023年4月1日 至 2023年6月30日	2023年8月14日 関東財務局長に提出。
	第82期 第3四半期	自 2023年7月1日 至 2023年9月30日	2023年11月14日 関東財務局長に提出。

## 第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

## 独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2024年3月28日

第一屋製パン株式会社  
取締役会 御中

### 晴磐監査法人

東京都新宿区

指定社員  
業務執行社員 公認会計士 浅野 博

指定社員  
業務執行社員 公認会計士 成田 弘

#### < 財務諸表監査 >

##### 監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている第一屋製パン株式会社の2023年1月1日から2023年12月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、第一屋製パン株式会社及び連結子会社の2023年12月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

##### 監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

##### 監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

第一屋製パングループの食品事業に係る固定資産の減損	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>注記事項（連結損益計算書関係 4 減損損失）に記載されているとおり、会社は、当連結会計年度において、金町工場の福利厚生施設の老朽化に伴い施設の解体を行うことを決定したことから遊休資産として帳簿価額を回収可能価額（備忘価額）まで減額し、当該減少額11百万円を減損損失として計上している。一方、金町工場を除く全工場の有形固定資産3,936百万円及び無形固定資産26百万円について、営業活動から生ずる損益が継続してマイナスであることから減損の兆候があると判断しているが、回収可能価額（正味売却価額）が帳簿価額を上回っているため、減損損失を計上していない。</p> <p>減損の兆候がある資産又は資産グループについては、減損損失の認識の判定を行い、減損損失を認識すべきであると判定した場合は帳簿価額を回収可能価額まで減額し、減損損失を計上する必要がある。</p> <p>会社は、事業用資産及び遊休資産のいずれにおいても、正味売却価額を回収可能価額とし、事業用資産については、外部の不動産鑑定士による不動産鑑定評価額から、解体撤去費用を含む処分費用見込額を控除した金額として算定している。不動産鑑定評価には主として原価法が適用されており、重要な仮定は建物の再調達原価及び土地の更地価格である。処分費用の重要な仮定は購入業者や解体業者からの処分費用の見積り金額等に基づく将来の見込額である。</p> <p>事業用資産のうち、減損の兆候が認められた有形固定資産3,936百万円及び無形固定資産26百万円の減損損失の計上要否については、連結財務諸表に重要な影響を及ぼすものであり、不動産鑑定評価額の算定に用いられた評価手法、建物の再調達原価及び土地の更地価格の主要な査定項目について専門性が伴うものであること、また、処分費用の見積りは不確実性があり、経営者の判断を伴うものであることから、当監査法人は当該事項を監査上の主要な検討事項と判断した。</p>	<p>当監査法人は、食品事業に係る金町工場を除く全工場の有形固定資産3,936百万円及び無形固定資産26百万円に対する回収可能価額（正味売却価額）について、主として以下の手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 正味売却価額の算定において使用された外部専門家による不動産鑑定評価を検証するため、不動産鑑定士の資格保有者を関与させ、会社が利用した不動産鑑定士の適性、能力及び客観性の検討、評価手法、建物の再調達原価及び土地の更地価格の主要な査定項目を検討した。</li> <li>・ 処分費用見込額を検証するため、経営者が外部業者から取得した見積書と比較した。</li> </ul>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

### 連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

### 連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

## < 内部統制監査 >

### 監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、第一屋製パン株式会社の2023年12月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、第一屋製パン株式会社が2023年12月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

### 監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

### 内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

### 内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

### 利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上

1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。  
2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。

## 独立監査人の監査報告書

2024年3月28日

第一屋製パン株式会社  
取締役会 御中

### 晴磐監査法人

東京都新宿区

指定社員  
業務執行社員 公認会計士 浅野博

指定有限責任社員  
業務執行社員 公認会計士 成田弘

#### 監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている第一屋製パン株式会社の2023年1月1日から2023年12月31日までの第82期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、第一屋製パン株式会社の2023年12月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

#### 監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

#### 監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

第一屋製パン株式会社の食品事業に係る固定資産の減損

連結財務諸表の監査報告書に記載されている監査上の主要な検討事項（第一屋製パン株式会社の食品事業に係る固定資産の減損）と同一内容であるため、記載を省略している。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計



事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- 
- 1 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。
  - 2 XBRLデータは監査の対象には含まれていません。